

被爆者調査員名簿

[illegible]

- * 各都道府県推進（支持）委員会によって実施された、一般調査を中心とする、シンポジウムのための被爆者調査の調査員名簿。
- * とくに表示のないものは、一般調査員のほかに医学および生活史調査員を含む場合があります。生活史調査員のうち、調査データが日本準備委員会に寄せられた分については、別に 282 ページに一括して掲載した。
- * 都道府県は北から南へ並べたが、名簿の到着が遅れた数府県は後へまわした。
- * 各都道府県内で氏名は50音順に並べたが、寄せられた名簿にフリガナが付されていないため、読みちがいがありうることをおことわりしておく。姓のみしかわからないものは省いた。
- * 多くの推進委員会から、送付した名簿以外にも調査員がいる旨の連絡があった。

子影昭治子雄美子男二治肇宣和治実浩彦一郎伴子義隆清子一夫子茂博晴範則夫み雄子功夫子志子二夫都
ま當正 昭喜利竜千定晃文 勝敏佑 正和寿盛恒加克俊 久良武邦マ 正武よ三ひ信妙 節悅純清光健秀

井尾川坂沢沢沢島西野村岡田 尾岡野目立口鳥勢本原詰本本見川部根田谷山川内西口谷沢沢山谷山地島原山井
永長中永中中長中中中中奈成西西西北根野野能野荻橋橋蓮服羽濱浜早春坂坂樋日比平平平兵福福藤

行郎子子子薰毅ぎ也雄一暢子子和二剛功喜夫男雄子郎芳男洋丈夫男子典子郎通美彦次子コ郎子夫典子子郎子海
義三富文伶 さ達信 秀路美義讓順 一芳邦輝美史博忠 保信正邦孝紀俊正勝武弘啓カ太艷泰 テ庸栄昭春

木川 根田岡野橋橋橋橋橋橋見內内内田田山崎沢田井川谷中中辺浦口本吉畑村城島西平永田村原井
鈴砂関関添高高高高高高高高竹竹竹竹竹武竹武田田多田立立田田田田谷谷谷田田都出寺藤徳富富鳥直

男代子子裕郎子義雄恵子美夫み男夫誠子子江彦の子子立志子一吉子誠浩一枝義三央子子輔正子三子
保鈴勝久玲 二俱信五澄浜明節ひと征勅 美元香美広政正ふ光由正清妙耕豐礼 潤百信秀剛英かき善 正安喜

林斐松山山藤井根根倉木田木木本藤藤藤藤見村光川原田田田谷 崎田田水館島 富保原佐木木木木木木木
小許小小小齊酒坂坂佐桜迫佐佐佐佐里沢重篠篠柴柴淡嶋島島清下生慎新真菅諏鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴

幸子之雄明治隆徳子子介信文夫子彦子次枝一子剛子枝一高義惇子行雄利良男子一子加子子行志子子明宏子行
信和茂徳英哲 継鶴節永博博重札頭多清一政恵 惠利秀義貞堂弘明員貞幸佳涼一夏亮民勇仁光泰 忠奈正

垣倉村谷合上口島地崎平村村田田地 島同平原瀬村村元保御田山木田口泉野野樽島玉番塚藤藤西林林林
神上上神河川川川川川河河神神木菊菊岸鬼儀北北木木木木木態栗栗黒桑外古河郷小小兒小小五後小小小

子保子子夫一の勝吉忠恵夫江子人美惠隆美一昭史士エ夫吉広ヨ広哉敏利夫子昭子子男一郎枝雄雄子子さ
祐 順愛利潤信 元 良達清広公由 弘裕信辰雅浩ト守謙リヤ末徹 光明玲五澄啓民信達初重力ミ典潤ま

川口倉戸藤岡保島田高谷東西場室森山田田野野田村崎崎沢切智丸野寺畑戸 谷山原原山野城藤藤井保山江
京 江江江遠大大大太大大大大大大岡岡岡岡奥奥尾尾小押越音小小折鏡角蔭檜梶片勝葛加加金金鐘ケ

東 子美也堯順子雄ッ子子子浩子一子生志子子明吉子明代子洋隆雄子一信达治止朗明子雄子代樹雄雄男代
般 秀雅卓 弘敏カ美まり町 さ眞菊東北愛美慶康政陽哲信真 滋直洋正ま誠 裕豊は行三や茂重勝政寛

<一般> 柳山司塚山利上達達本部利井井藤藤上島井川川川崎田村川宮原藤藤東垣口村坂崎沢間坂野野之本田田山
＜一＞ 青青赤赤秋浅畔安安油安甘荒新安安池池石石石石磯市一出伊伊伊稲井今岩岩岩岩植上上植上牛内姥

[illegible]

五、

美成子	美千夫	三治一	慎郎	美代二	子代馨	勇子幸	子二郎	穗義英	子美智	子治秋	信子一	光一	昇子	美由美
幹真一	賢卓正	準雄真	郁章孝	千裕千	佐紀久	和雄太	栄輝正	紀房喜	重萬誠	重景喜	良勝三	真由真		
瀬田松永	田間沢	卷崎田	田田中	升本本	本前永	屋田内	田部藤塚	沢村中	田村山	田下本	生田浅	森和田		
村村持	森盛安	柳八山	山山山	山山山	山山湯	吉吉米	脇和渡加園	滝竹田	徳根桧	増宮室	山湯和			
明夫香	子勉城	一子男	進夫修	久隆一	男三明	恵巳幸	寿子正	春勲郎	也吉子子	敏子子	文恵海	子次正	修治夫	
正幹隆	鶴健千	哲武正	一修秋	敬孝秋	正範靖	和光雅彰	瑩と庸美	勝恵直	豊千和	伊千幸	昭孝			
谷木島	田平林	田井岡	岡田田	村本山	浦浦野	下戸上	沢宅田	地野本	井<医>	相板一	伊今岩	岩内大	岡小落	柿葛加
細堀前	前正增	松松松	松松松	松松松	三水水道	水南嶺	三官宮	宮宮宮	宮村<學>	沢谷瀬	西瀬永	喜島山	棕合谷	西藤藤
森樹夫	一彦子	也孝波	巳子稔	雄男子	よ彦隆	みる子子	代伸司	子之行	明治重	雄収吉	美博子	志治雄	典吉枝	彦男子
知茂幸	一暢博	卓千勝	ト正昌	淑や伸	かみ悦	春久千	雅弘輝	清金幸	浅孝峰	久貞晴	充俊良	義英良	英利	
雪万茂	中谷村	口沢井	床田野	山井神	沢島島	村倉田	村本本	川村場	呂川川	井崎長	谷濱林	林林林	原日疋	平広福
田村阪	尻中	田玉田	出寺土	戸富伴	鳥永中	中中永	中名成	西西西	蟻二野	野長花	濱林林	林林林	原日疋	平広福
竹竹田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田
久武一	江子雄	子代美	子光次	彦司夫	武優子	研二美	俊勇治	ぶ子雄	一郎三	春雲晃	彦一郎	基夫雄	守子潔	誠幸緑
良敬安	陽茂千	真則正	健雅匠	敏悠昭	晴雅專	しの八和	理耕信	正出元隆	英一規	真美善	桂正義	宏悟		
沼賀井	島嶋藤	藤村藤	田井井	原原木	木木木	藤田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田	田田田
鯉古小	小小後	小近濟	酒酒酒	樽樽樽	佐佐佐	佐沢志	篠柴柴	洩清白	白杉杉	杉杉杉	杉杉杉	杉杉杉	杉杉杉	杉杉杉

次之代	夫	志	正	愛
三守政	美佐	は	貴	浩
井月		重	木	田
村望森	森	森	八	矢
＜一般＞				
相阿	賀	坂	谷	辰
浅	荒	飯	飯	家
五	生	池	石	石
石	石	石	石	石
磯	井	市	市	伊
稻	井	今	今	岩
上	上	上	上	上
宇	佐	見	田	藤
宇		田	村	島
宇		藤	村	石
内		井	井	井
宇		梅	江	遠
尾		大		
大				
子	里	万	辰	好
子	子	幸	惠	晋
子	子	弥	彦	勇
子	子	智	子	子
子	子	夫	純	子
夫	純	子	男	夫
孝	綾	子	久	郎
孝	淑	子	惠	人
成	子	夫	彦	子
昭	士	子	三	彦
生	代	昭		
昭				

岡
巳子夫よ彦保登子治秋眞一子敏衛光二子次次吉吉子え孔拡生夫ろ子雄二司子代代夫巳子郎雄珙八明弥博一
正典秀み和 芳重芳 孝さ正元 寛加賢管輝登貞み成 幸昭ち靖伸勝了節美文隆克英金哲 平 克
本山山山木木木田古野橋橋下川下辺本塚岡田井桶浦島野莊村羽沢田溝田崎田田井沢井田原野浦機江谷崎
杉杉杉杉鈴鈴鈴鈴須瀬高高高滝竹竹田塚手外徳永中長中中南西丹野野野袴花原久平平深前前牧松見水水宮
静
茂源次二一昭子吾夫敦泰忍恵志武夫子二弘徳伍蔵史二幸夫一平久助代子忠人男子子吾夫子夷雄子信健久郎
金介 良民欽弘 君 成 勝典昇信悦啓慶崇重勝一公吉元泰之幸典 正在文ヒ健睦好 由栄英善 濱三郎
曾川泉藤尾田井垣川下橋部上田原井田田石石川下塚川幡下大藤谷合又沢野田谷田後藤藤藤藤藤登野田本
相芦有安飯飯石石石井石磯井岩上白内埋大大大大小小小柿加加加神川川北木窪熊栗向後小近斉斉佐沢沢鹿島杉

子	爾雄治夫子雄雄光広美治光三子夫夫瑛子男明久尚子稔治子一恵代一一一子人政治之治一夫雄子子弘一鈴
和昇盛正和孝三利武敏益今朝茂悦志昌迫祐佳良和泰幸光道彦初万啓慎与三四光光坂通修良健辰孝昌政健美	
沢沢沢村山山沢口山出沢林山瀬森畑幡内内口座沢田田山井岡坂沢下本山岡上松利崎口崎村浅本山川山月辺	
中中中中中永西野羽平平平平廣藤古古堀堀堀前松松松丸三宮宮宮宮向村村村毛矢山山山湯湯橫吉米若渡	
子勇雄男夫夫男子吉守雄子子徹子美子か徹一美夫ず子子弘子子男明郎雄和夫代子一一晏夫晴雄武子幸男夫	
民岳美幹敏邦美広孝智ミよみノ清実ち俊晴正み喜榮正美紘安正三治敏義和美洋秀紀公春寿春紀吉道	
塚坪西外口沢和倉崎沢下下田池井松林林林林林林松山藤入之水石沢原田山山木永橋内田田田屋田毛	
大大小小小野片神北木木久小小越小小小小小小小小小小小小小小佐塩塩清白白菅杉杉杉鈴巢関高竹坪伝伝土戸鳥	

利純三隆久隆みち妙百義行年千紀春正憲秀照芳政保行キサ由美孝義勝賢佐暎圭公美惠一彰明彦男樹子子子勉
山垣高井尾田野松畝堀島田井村原原立坂田田田田山尾尾下島尾浦浦本本輪田井川崎永山倉永原
葉原桧日平平平平平広深福福藤藤藤古保細堀堀前增増松松松松丸三三宮宮三牟村村森森森森矢安柳
エエ子子子代利城子章巳文子郎宏子子新志子史子ツ彦弘み吉樹ノ子徹治賢弘子勇士幸人一エ幸次已平雄子子裕子
タミ照孝玉勝鉄和雅義義美健成朋純孝周清チエミ正国は久英ミッ順洋和美え俊徳鉄ト敏浩博昇康尚千敏初
水石永山木木川田谷良川田山中並烟納本林村元井上橋山井柄里島島島瀬道山村江村村田田
清志白末相鈴鈴瀨園高比高滝武竹立田田田反辻土堤津津津寺富所土鳥長永中中中中中中中波西野浜林林

壽代子郎エ久え春子之子人雄雄平治男子豐子樹輝郎子則三文エ子男義江子子郎孝美エ子子子起子子信人ブエ子
三千ツククた鶴千一紀一利実康三代士和正義八美高修正キ節武一小千久泰寿恵フ洋頼由弘末節定シスハル
三口口崎崎崎崎島野原本尾口下島島志保保木々綱藤宮柳藤藤藤井井井田本間井田屋藤藤野葉町村原
川川川川川川川川川川神北木清清久久久熊黑黒小後小小樵斎斉境境酒酒坂坂坂坂坂佐桜笹笹佐佐佐椎式重篠
志郎子憲郎子春茂章俊宏子ヤ藏重泉一林昭郎信満み学英人郎章子也昇彦吉夫子也進子明里生吾子一夫隆子弓ル
正征初良太美清盛昭光ア伊勢武清敏逸保むつ敏昭千博利真一信泰由憲美智知元信芳竹定信眞ハ
尾塚上原井江崎下永橋橋橋本本本田田島田田田頭上口石石保保沢田谷方上村村川川寺田末田田戸田
稻犬井井今入岩岩岩岩岩岩岩上上牛後内内浦浦江江江戎大大大大大大大緒尾岡岡小小荻小甲加鎌鎌鎌上刈
彬昇枝志美子子義美新広純多加哉走郎子守美茂枝子雄美博昇子生義宏明雄子雄正
喜哲正美静弘照隆美多鬼金典生幸良守雅好敏和久正博俊ナ孝
崎崎本藤山川本山島口下野本本本本本本田田富中中永松村村村元崎田辺
官宮宮武村森森森森矢柳山山山山山山山山山山山山吉吉吉芳芳吉吉吉佳米若渡渡
春之子郎子爾生一子子子枝一彦子義芳雄子薫イ庸九明男渡敏ミ子朗人エ彦文子長
安和典次朝清利常濶孝ヲ民絃紀征忠甲安洋デヂ十敏春武キ孝つ伍広シ和哲京一般道辰征幸正ヨ吉勝廣見
山山山中口原口田山田田田永木竿江所庄池森浦枝尾岡岡岡口尻田原内山月木木木木本春秋東新荒荒荒荒荒碇碇
畑畑花羽浜原原原原東樋平平平福福福福藤藤藤藤古別本正本正松松松松松溝溝水南三宮<一>

[illegible]

雄ノ郎子幸子子	雄男江子要昭子操子療連吾弓子子枝子司夫子敏美代子かり幸子忠子子子す
恒ハルマサ寿千鶴重榮照頼	寅邦榮小夜スズ英純幹正真洋直清政美清満紀和勝茂鈴久ゆ政鈴喜義勝敏富末み
田野山原武杉辺辺谷	田長本尾上内富川下、川上戸鳥村江田川田島田田崎田上伽永尾野口崎崎
吉吉吉吉力若渡渡綿	津朝増松村森森横吉石 _(以下) 井上萱木久迫菅添岳富中長永野浜原洵補増丸丸溝宮宮森

彦子 兼子 大
下田 山下 兼子
阿部 輝代 人
有池 直次 郎
岩田 明 人
宇都宮 宗 茂
梅木 信 義
江藤 幸 人
小藤 一 朝
河野 たか 子
小小 栞 竜 一
小若 女 松
治
千
＜一般＞
相川 喜 七
青木 一 恵
赤木 太 郎
浅利 勝 美
荒川 京 子
有坂 信 明
有坂 フミ 子
安藤 正 雄
飯島 靖 雄
池上 哲 郎
石井 文 一
石田 泰 郎
市渡 龍 孝
市原 村 雄
今井 井 豊
岩瀬 宝 俊
大塚 和 作
大小 美佐 子
小小 ハツ 江
小川 由 喜
小谷 光 起
小沢 道 恵
春日 井 剛
片野 子
金子 雄
河辺 祐 子

子一子	夫士誓治夫豊彦弘実正樹男信	子夫子文和郎子盛子子子二巳史覚雄夫子雄哉睦春彦一郎枝子美子
篤賢節	憲節純重英利茂助	タ秀十宏芳和愛重京節和滋津晴克博正時真幸俊友茂義喜た則富
山野辺	木藤取原保口矢岡川本田辺	本中藤藤井名葉木田橋村山田中崎岡田井田広原沢喜松川嶋
横吉渡	佐佐高田多野羽藤古宗山吉渡	岸熊小近近松椎椎鈴住高竹館田田塚鶴富鳥仲西西荻花日久堀真

代郎子枝雅高子	之雄子明子江子子二稔子子	明子子夫子	雄吉人義市充堂人弘夫彦子三進榮惠昭江夫太郎
和成絢志	仁龍則敏美功優利秀和範	信フ叔勇勢	房永喜忠多
尾本野浦園川井	尾原藤場村瀬原藤藤田野中	坂坂田野田	鄉食川田藤賀田上俣股田賀島橋野野崎田部方
松松間三御皆向	飯市伊大岡加栗後齊柴添田	有有石大奥	吾安石石伊糸稻井猪猪今大大大奥奥尾勝勝川
	＜醫學＞	＜生活史＞	＜一般＞

夫吉勇宏一司代	光嘉和慶哲瑞	田野口本山田辺	持矢山山横吉渡
子吉透子子子子子子	せき明一英照容富裕優	村田寄雲井見井本田内岡	田徳友南花人藤松山横吉
子千美子子子子子子	淑利江クニ宮	沢西藤藤辺	金小斉佐田
子子光司雄江子人弘子男三子司夫賢聡夫春雄	和美智秀晴久智頼典節幸研知宣寿光彰	上津田村幡橋野谷藤田戸川田中原田山	川河神岸木木倉河小後坂迫宍品島田田玉茶

寺永中長中西野林林原福藤
戸井尾嶺村尾田
三正光幸
也治良二照子郎登一子
初佳代子
谷次郎
＜醫學＞
金森ひろたか
＜生活史＞
有馬みや子
岐
＜一般＞
井深牙子
今尾あさ子
臼井一子
大沢田信男
奥内守之久
柿納信義保
加北村義昇
久保山為子
久米吉子
交田崎づ
沢賀正稔
篠賀樹
千弘夫
田弘
京
＜一般＞
相賀啓司
青山征男
赤井信吾
赤益輝
芦益市
足丈司
東喜公
荒憲一
新泰子
有陽子
安賀みさか
藤和明

堀松松丸三	道森山山吉柳兩	西浦原	津井木田城藤田榮見	省五惠正德純	恒世忠	吾朗子作雄勝一健積子雄	保	枝郎進夫太德均子司了郎三
山	阜	田	部田田澄佐田田藤山田口田田本	久	銳龍和一良美和よ久美眞正安	男雄男幸治代男子夫司澄梓光透子堯	良良邦貴和巳孝一義	藤吹上上上合倉村本内田井
伊伊井井井居井井池池石								

磯市市市糸稻今今今宇上上植植梅梅江遠小小小小小小越尾大大大大大大大大岡岡岡岡岡岡岡岡奥奥桶沖加	岡川木田井井井田村野田原木田原原幡藤原川城倉谷野智本石木城関沢原槻槻秦田田本本本本本山村村田藤	淑義迫元フ興直陽迫博吉し三徳厚吉花寿比豐美健伸昌隆弘忠正元行新弘美優克重啓和たま	子行彦学実彦エ治弘一男史雄の信孝夫博滋治正雄直子彰潔古光純子朗子子夫和明夫孝雄一次子子稔海久郎美子
---	---	--	---

形片勝門金兼蒲神神龜川河川川川木木木木北草久栗小小古小小小駒郷五佐佐佐佐佐佐阪猿猿沢沢志志塩重島	野山野脇森定田谷山浦音崎端端村村村村下村刈山梶林藤牧松南根原藤間木竹藤藤藤伯田渡山田田治原見歳田	和修光テ英敏美富聡久昭国千武正松順英惠静千佳伊正淑充久安久卓修高正美静淳由雅義トメ敏修憲洋	彦享子馨代イ介郎枝子子子信世子子美三三機子子崇晃晋子郎明仁子夫雄彦雄二子司路子一子文男ヨ照二郎子
--	--	---	--

[illegible]

中	西	み	な
中	村	寿	孝
永	井	美	知
永	原	知	子
長	江	子	誠
長	島	富	美
南	部	幸	子
新	田	治	雄
西	尾	敬	治
西	岡	啓	子
西	垣	紘	智
西	川	仁	三
西	川	和	郎
西	川	幸	一
西	川	重	子
西	村	博	雄
西	村	真	史
西	村	三	規
西	本	敬	惠
西	山	健	子
西	山	裕	治
野	口	憲	美
紀	平	昌	男
長	谷	明	義
長	谷	清	子
長	谷	澄	夫
橋	本	道	明
服	部	順	一
服	部	和	一
浜	野	富	貴
林		幸	子
原		憲	雄
菱	井	正	子
疋	田	和	夫
久	光		美
姫	井	吉	覺
平	川		夫
平	野	真	由
平	光	重	美
広	瀬	里	逸
広	瀬		美
広	瀬	敏	茂
深	田		博
福	島	泰	守
福	田	幸	弘
福	本	幸	一
藤	井	賀	子
藤	田		昌
藤	本	直	也
		初	美

植松昭一 永原 誠
遠藤 滋子 細井 未央子
田 潤 啓 子

雄久一	英喜	尾筋	中中	司史	謙俊	駒本	生岡
夫一郎	久性	村野	中西	一昭	竜元	川藤	小加
郎男	太政	間本	迫橋	一三	孝熊	多本	喜楠
功健	寅	浦田	番日	一郎	順竹	本玉	楠兒
文彦	秀勝	田本	藤山	弘務	次知	家古	坂更
士治	三代				裕		世

■ シンポジウムの諸役員

■ 国際準備委員会／国際スポンサー／

国際調査団(第1段階)

■ 日本準備委員会／広島準備委員会／

長崎準備委員会

■ シンポジウム推進団体連絡会議

■ 都道府県シンポジウム推進(支持)委員会

■ シンポジウムのプログラム

■ シンポジウム(第2段階)への招請状

■ NGO軍縮特別委員会の関連決議／議事録

■ 日本シンポジウムの発展・意義・支持

シンポジウムの諸役員

総会議長

国際側

アーサー・ブース（国際平和ビューロー）
 ペギー・ダフ（軍縮と平和のための国際連合）
 チッタ・ビスワス（世界平和評議会）
 ピエトロ・ラピチレラ（世界民主青年連盟）
 シューラ・ヤング（婦人国際平和自由連盟）

日本側

柳本嘉昭（日本青年団協議会）
 山高しげり（全国地域婦人団体連絡協議会）
 天池清次（全日本労働総同盟）
 壬生照順（核兵器廃絶をめざす宗教者NGO連絡会議）
 中林貞男（日本生活協同組合連合会）
 槇枝元文（日本労働組合総評議会）

主要役員

運営委員長

アーサー・ブース

起草委員長

三宅泰雄（日本学会議会員）

事務局長

川崎昭一郎（千葉大学）

会計責任者

服部 学（立教大学）

スポークスマン

原田東嶺（病院長）
 小野 周（東京大学）
 田沼 肇（法政大学）
 ユヴェイス・アハメド（スリランカ）
 ジョセフ・ロートブラット（英）
 メアリー・カウフマン（米）

総括報告者

フランク・バーナビ（英・ストックホルム国際平和研

究所）

マリアン・ドブロシェルスキー（ポーランド国際問題
 研究所）

運営委員会

国際側

ショーン・マクブライド（国際平和ビューロー）
 アーサー・ブース
 ペギー・ダフ（軍縮と平和のための国際連合）
 ピエトロ・ラピチレラ（世界民主青年連盟）
 シューラ・ヤング（婦人国際平和自由連盟）
 ローズ・ブース
 チッタ・ビスワス（世界平和評議会）
 ファニー・エルデマン（国際民主婦人連盟）
 フィリップ・ノエル＝ペーカー（国連協会世界連盟）
 ヴィケンチ・マトヴェーエフ（ソ連）
 バーバラ・レイノルズ（米）
 ユヴェイス・アハメド（スリランカ）

日本側

三宅泰雄
 川崎昭一郎
 庄野直美（広島女学院大学）
 草野信男（前・東京大学）
 石田 忠（一橋大学）
 川田 侃（上智大学）
 関屋綾子（日本YWCA）
 佐藤行通（日本山妙法寺）
 新井則久（日本労働組合総評議会）
 伊東 壮（日本原水爆被害者団体協議会）

起草委員会

三宅泰雄
 フランク・バーナビ
 マリアン・ドブロシェルスキー
 アーサー・ブース

川崎昭一郎
ショーン・マクブライド
ジョセフ・ロートブラット
アレクサンドル・カリアディン（ソ連科学アカデミー
・世界経済国際関係研究所）
フィリップ・ノエルニベーカー

分科会担当役員

第Ⅰ分科会

議長

フランク・バーナビ
ジョージ・ウォルド（米・ハーバード大学）
パヴェル・ラムザエフ（ソ連・放射線衛生学研究所）
秋月辰一郎（聖フランシスコ病院）
草野信男
高部益男（放射線影響研究所）

総括報告者

L・B・シタニック（ハンガリー・フレデリック・ジ
ョリオ＝キュリー名称国立放射線生物学・放射線衛
生学研究所）
庄野直美

第Ⅱ分科会

議長

メアリー・カウフマン
ルネ・ワドロー（スイス・開発研究所）
金子 逸（世界民主青年連盟）
中鉢正美（慶応義塾大学）
横山 英（広島大学）

石田 忠
総括報告者
グウェンディ・ナイト（英・児童精神医学）
山手 茂（東京都神経科学総合研究所）

第Ⅲ分科会

議長

ウィリアム・ロリンズ（全米キリスト教会協議会）
坂本 宏（フレンド世界協議委員会）
ジョージ・フックス（オーストリア・国際平和研究所）
川田 侃
今田斐男（長崎平和教育研究会）
今堀誠二（広島大学）

総括報告者

ナタリー・シャイラス（米）
岡本三夫（四国学院大学）

第Ⅳ分科会

議長

ヴィケンチ・マトヴェーエフ
イレネフツ・マテラ（世界民主青年連盟）
ペギー・ダフ
関屋綾子
佐藤行通
新井則久
北西 允（広島大学）
総括報告者
シェーラ・オークス（英）
福島要一（日本学術会議会員）

シンポジウム国際準備委員会の機構と役員

1. 構成

国際準備委員会は開かれており、国際シンポジウム（第2段階）の準備と支援にたいして助力したいと望む非政府組織は、国内組織、国際組織を問わず、すべて加入できる。加入した非政府組織には、シンポジウムの成果を世界に普及すること、およびその能力に応じ100スイスフラン（最低基準額）を単位に醸出することによりジュネーブ事務所費の財政を援助することが期待されている。

大きなNGO、とくにジュネーブに近いNGOはビューローの常任委員1名を指名するよう要請される。

2. ビューロー

下記のNGOはビューローを構成するため委員を指名することが要請された。ビューローは国際準備委員会の会議が開られない期間、国際準備委員会と国際スポンサーを代表して活動する。

国際平和ビューロー（IPB）
婦人国際平和自由連盟（WILPF）
世界平和評議会（WPC）
軍縮と平和のための国際連合（ICDP）
世界民主青年連盟（WFDY）
国際民主婦人連盟（WIDF）
国際国連学生運動（ISMUN）

スイス平和評議会（SPC）
国連協会世界連盟（WFUNA）

3. 国際調査のスポンサー

国際調査を後援することに賛同するNGOと個人はリストにし、その名前は必要に応じて発表される。スポンサーは、国際準備委員会の会議についての情報を提供され、また国際準備委員会の会議に出席し発言できる。スポンサーは財政的醸出を行なうことが求められる。国際準備委員会ビューローは国際準備委員会の会議が開られない期間、スポンサーを代表して活動する。

4. 国際準備委員会とそのビューローの役員

会長 ショーン・マクブライド
副会長 （ビューローを構成する各NGOは副会長を1名指名できる）
ペギー・ダフ（ICDP書記長）
ピエトロ・ラピチレラ（WFDY会長）
ヘフジバー・メニューヒン（WILPF）
会計責任者 ジャン・ビエール＝ロシェ（SPC）
議長 アーサー・ブース
ジュネーブ事務所との東京駐在連絡員 川崎昭一郎
東京事務所とのジュネーブ駐在連絡員 ローズ・ブース

シンポジウムの国際スポンサー一覧

団 体

アラブ法律家連盟
 アジア仏教徒平和会議 (A B C P)
 オーストリア平和協会
 キリスト者平和会議 (C P C)
 平和研究者・活動家国際会議継続委員会
 科学と社会のための評議会 [イギリス]
 友和会 (F O R) [イギリス, アイルランド]
 フランス万国平和協会
 フレンド平和・国際関係委員会
 フレンド世界協議委員会
 ドイツ平和協会 [戦争抵抗者インターナショナル西ドイツ支部]
 軍縮と平和のための国際連合 (I C D P)
 国際婦人評議会
 国際平和ビューロー (I P B)
 国際国連学生運動
 国際学生連合 (I U S)
 環境研究と保全のための国際青年連盟
 平和のための労働者行動
 リューベック・クエーカー会議 [西ドイツ]
 全国平和評議会 [イギリス]
 北部イギリス・フレンド平和理事会
 オムニア・ムンディ
 オスロー大学・紛争と平和研究部
 レジスト [アメリカ]
 スイス平和評議会
 ウプラサ大学・平和と紛争研究部
 婦人の声

戦争抵抗者インターナショナル (W R I)
 国際民主婦人連盟 (W I D F)
 婦人国際平和自由連盟 (W I L P F)
 世界YMCA同盟
 世界連邦主義世界協会 (W A W F)
 世界キリスト教会協議会 (W C C) [国際事情に関する教会委員会]
 世界民主青年連盟 (W F D Y)
 世界科学者連盟 (W F S W)
 国連協会世界連盟 (W F U N A)
 世界平和評議会 (W P C)
 平和・独立・諸国人民の平等のためのユーゴスラビア連盟

個 人

フィリップ・バーバー (英)
 リッチ・カルダー卿 (英)
 ヘフジバー・メニューヒン・ハウザー (英, 米)
 ラルフ・ヘグナウエル (スイス)
 G・ダール・ヘンセン (ノルウェイ)
 アーサー・ヒューレット (英)
 ジェームズ・アヴェリ・ジョイス (英)
 ポール・J・M・ルゲ教授 (仏)
 ポール・G・M・レヴィ教授 (ベルギー)
 ショーン・マクブライド (アイルランド)
 ジュール・モック博士 (仏)
 アルヴァ・ミルダル (スウェーデン)
 フィリップ・J・ノエル＝ペーカー卿 (英)
 ヘルムート・フォーゲル博士 (西独)

国際調査団 (第1段階) のメンバー

* 国際調査団のメンバーでシンポジウム第1段階に参加できなかった方

国際側専門家

自然科学

P・V・ラムザエフ ソ連, 放射線衛生学研究所, 国際放射線防護委員会委員, WHO推薦。
 J・ロートブラット イギリス, セントバーソロミュー医大病院, 前バグウォッシュ会議事務局長, WHO推薦。
 ジョルマ・K・ミエッチネン フィンランド, ヘルシンキ大学, 放射線化学, NGO推薦。
 ジョージ・ウォルド アメリカ, ハーバード大学, 生理学, ノーベル賞受賞, NGO推薦。
 高部益男 日本, 放射線影響研究所常務理事, WHO推薦。
 阿波章夫 日本, 放射線影響研究所, 臨床検査, WHO推薦。
 L・B・シタニック ハンガリー, フレデリック・ジョリオ＝キュリー名称国立放射線生物学・放射線衛生学研究所所長, WHO推薦。
 ダニロ・ペトロビッチ ユーゴスラビア, ルデル・ボスコビッチ名称研究所, 放射線生物学, WHO推薦。
 ズデネク・ディーンズツビエ チェコスロバキア, チャールズ大学, 原子核医学, WHO推薦。

社会科学

エリス・ボウルディング* アメリカ, コロラド大学, 社会学, ユネスコ推薦。
 ロバート・ジェイ・リフトン* アメリカ, エール大学, 精神医学, NGO推薦。
 グウェンディ・ナイト イギリス, 児童精神医学, NGO推薦。
 ヘクタ・グロス・エスピエル* ウルガイ, 社会学, ユネスコ推薦。

メアリー・M・カウフマン アメリカ, 国際法, ユールンベルグ裁判検察官, NGO推薦。
 ユヴェイス・アハメド スリランカ, 教育省教育局長, NGO推薦。
 アレクサンドル・カリアディン ソ連, ソ連科学アカデミー・世界経済国際関係研究所, 軍縮問題・国際関係, ユネスコ推薦。
 エレオナラ・マッシーニ イタリア, 世界未来研究連盟書記長, 社会学, ユネスコ推薦。

総括報告者

ルネ・ワドロワ スイス, 開発研究所, 社会学, NGO推薦。
 E・H・S・バーホッフ* イギリス, ロンドン大学, 核物理学, 世界科学者連盟会長, ユネスコ推薦。
 マリアン・ドブロシエルスキー ポーランド, ポーランド国際問題研究所, 国際関係・軍縮問題・哲学, NGO推薦。
 フランク・バーナビ イギリス, スtockホルム国際平和研究所 (S I P R I) 所長, NGO推薦。

助言者

バーバラ・レイノルズ アメリカ, ウィルミントン大学, 平和教育。
 ジュディ・ダール＝ハンセン オーストラリア, WHO職員, 保健教育。

日本側専門家

専門委員

自然科学・医学

飯島 宗一（広島大学長，病理学）
 石田 定（広島原爆病院内科部長）
 大北 威（広島大学原爆放射能医学研究所長，血液学）
 岡島 俊三（長崎大学，生物物理学）
 小野 周（東京大学，日本学術会議会員，物理学）
 草野 信男（前・東京大学，病理学）
 田島 英三*（立教大学，物理学）
 西森 一正（長崎大学，医学）
 原田 東峨（広島・原田外科病院院長）
 三宅 泰雄（日本学術会議原子力問題特別委員会委員長，地球化学）

社会科学・平和教育

石田 明（広島平和教育研究所 事務局長，平和教育）
 石田 忠（一橋大学，社会学）
 川田 侃（上智大学，日本平和学会会長，国際関係論）
 具島兼三郎*（長崎大学長，国際政治学）
 関 寛治*（東京大学，平和学）

中鉢 正美（慶応義塾大学，経済学）
 松本 金寿（前・東北大学，日本学術会議会員，心理学）
 湯崎 稔（広島大学原爆放射能医学研究所，社会学）

調整委員・総括報告者

秋月辰一郎（長崎・聖フランシスコ病院医長，JNPC事務局代表）
 伊東 壮（山梨大学，社会学，JNPC事務局代表）
 川崎昭一郎（千葉大学，物理学，JNPC事務局代表）
 庄野 直美（広島女学院大学，広島大学平和科学研究センター客員研究員，核物理学・放射線生物学，JNPC事務局代表）
 田沼 肇（法政大学，社会学，JNPC事務局代表）
 服部 学（立教大学，物理学，JNPC事務局代表）
 布施 豊正*（カナダ・ヨーク大学，同志社大学客員教授，社会学）
 （注）JNPCはシンポジウム日本準備委員会の略



国際調査団初会合（東京・学士会館）

シンポジウム日本準備委員会の機構と役員

1. よびかけ人

日本準備委員会の結成を呼びかけた78氏は助言者をつとめる。

2. 日本準備委員会幹事会

被爆者問題に関与してきた約50名の個人によって構成され，日本準備委員会の意思決定機関であり，日本準備委員会の日常の活動の方向づけを与える。

3. 代表幹事

日本準備委員会および同幹事会を代表する。下記のメンバーで構成される。（いずれもよびかけ人であり幹事会の構成員である。）

飯島 宗一（広島大学，病理学）
 草野 信男（前・東京大学，病理学）
 具島兼三郎（長崎大学，国際政治学）
 佐久間 澄（前・広島大学，物理学）
 上代 たの（前・日本女子大学，英文学）
 任都栗 司（前・広島市議会議長）
 槇枝 元文（日本労働組合総評議会議長）
 三宅 泰雄（日本学術会議会員，地球化学）
 森滝 市郎（前・広島大学，倫理学）
 行宗 一（日本原水爆被害者団体協議会代表委員）

4. 事務局代表

秋月辰一郎（長崎・聖フランシスコ病院）
 伊東 壮（山梨大学，経済学）
 川崎昭一郎（千葉大学，物理学）（事務局長）
 庄野 直美（広島女学院大学，物理学・放射線生物学）
 関口 和（国鉄労働組合）
 田沼 肇（法政大学，経済学）
 服部 学（立教大学，物理学）（会計責任者）

5. 諸委員会

日本準備委員会幹事会のもとに下記の4委員会を設ける。

(1) 専門作業委員会

下記の4小委員会を通じて国際調査のための作業文書

を作成する。

自然科学委員会
 医学委員会
 社会科学委員会
 平和教育委員会

(2) 組織委員会

下記の小委員会より構成される。

企画委員会
 調査委員会（被爆者調査）
 広報委員会
 国際委員会
 募金委員会
 (3) 広島準備委員会
 (4) 長崎準備委員会

* * *

日本NGO共同主催委員会と地域支持推進委員会

日本準備委員会は，シンポジウムの科学的客観性を保証し，内外を問わず政治的その他のバイアスをさけるために個人を基礎に構成される。各界各分野のすべてのNGOと個人がシンポジウムの準備と組織に積極的に参加するよう望まれる。

日本NGO共同主催委員会は日本準備委員会にたいし必要な人材，資料，財政を提供する。

地域支持推進委員会は各都道府県および市区町村につくられ，被爆者調査を行ない，シンポジウムの趣意を普及し，募金にとりくむ。

日本準備委員会幹事会の構成

代表幹事 (前出)
事務局代表 (前出)
幹 事
(自然科学担当)
小川 岩雄 (立教大学, 物理学)
小野 周 (東京大学, 物理学)
猿橋 勝子 (気象研究所, 地球化学)
(医学担当)
飯島 宗一
草野 信男
千葉 正子 (東京・医師)
原田 東岷 (広島・医師)
本多 喜美 (東京・医師)
(社会科学担当)
石田 忠 (一橋大学, 社会学)
今堀 誠二 (広島大学, 歴史学)
小川 政亮 (日本社会事業大学, 法学)
中鉢 正美 (慶応義塾大学, 経済学)
松本 金寿 (立正大学, 心理学)
山手 茂 (東京都神経科学総合研究所, 社会学)
(平和教育担当)
田川 時彦 (日本原水爆被害者団体協議会)
辻 キヨ (婦人国際平和自由連盟日本支部)
森田 俊男 (日本平和教育研究協議会)
山谷 新子 (日本基督教婦人矯風会)
(企画担当)
相原和光 (広島YMCA)
小林 徹 (日本平和委員会)
福島 要一 (日本学術会議会員, 科学史)
および事務局代表全員
(調査担当)
太田 誠一 (日本青年団協議会)
斉藤 義雄 (日本原水爆被害者団体協議会)
渋谷 正利 (宗教青年平和協議会)
峠 一夫 (全日本民主医療機関連合会)
服部 尚子 (日本基督教婦人矯風会)
福重泰次郎 (日本民主青年同盟)
丸山 益輝 (広島大学, 金属工学)
(広報担当)
井上与志男 (日本原水爆被害者団体協議会)
嶋田 清隆 (日本青年団協議会)
田中 里子 (全国地域婦人団体連絡協議会)

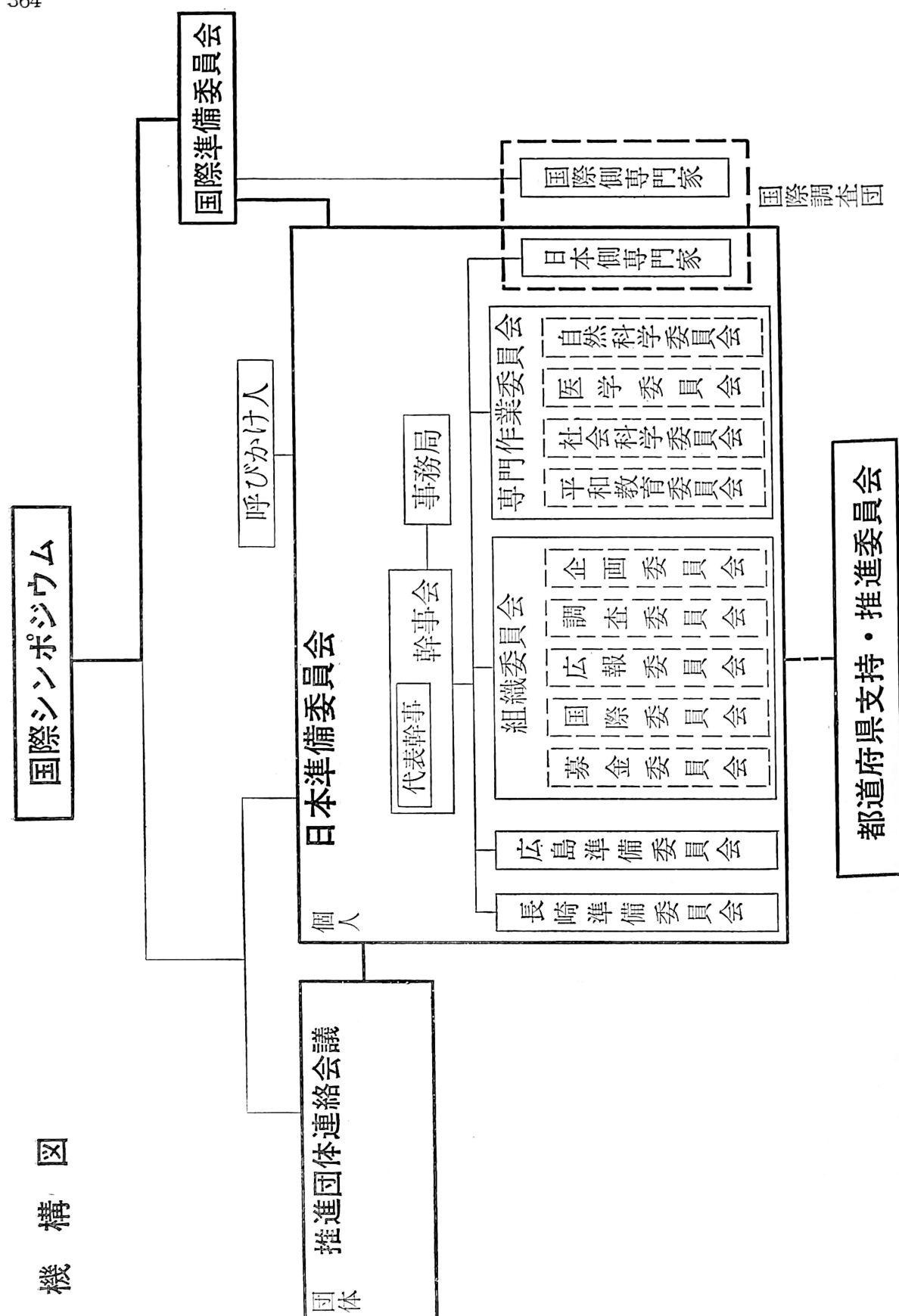
中嶋 正昭 (日本キリスト教協議会)
(国際担当)
久保 文 (文筆業)
佐藤 行通 (日本山妙法寺)
関屋 綾子 (日本YWCA)
高桑 純夫 (愛知大学, 哲学)
西村 関一 (世界連邦建設同盟)
吉田 嘉清 (国連要請国民代表団派遣中央実行委員会)
(募金担当)
木戸 大 (日本原水爆被害者団体協議会)
中林 貞男 (日本生活協同組合連合会)
檜山 義夫 (日本学術会議会員, 水産学)
米原美智子 (日本婦人団体連合会)
(推進団体連絡会議担当)
新村 猛 (前・名古屋大学, 仏文学)
(広島準備委員会担当)
相原 和光
今堀 誠二
庄野 直美
原田 東岷
丸山 益輝
(長崎準備委員会担当)
秋月辰一郎
小西 良士 (長崎大学, 薬学)
武居 洋 (長崎大学, 生化学)
葉山 利行 (長崎原爆被災者協議会)

日本準備委員会結成よびかけ人

秋月辰一郎 (長崎・聖フランシスコ病院医長)
浅賀 ふさ (日本福祉大学名誉教授)
飯島 宗一 (広島大学長, 医学)
家永 三郎 (東京教育大学, 歴史学)
石田 忠 (一橋大学, 社会学)
磯村 英一 (東洋大学学長, 都市社会学)
今堀 誠二 (日本学術会議会員, 広島大学総合科学部長, 歴史学)
植村 環 (日本YWCA名誉会長)
江上不二夫 (元日本学術会議会長, 生化学)
江口 朴郎 (日本学術会議会員, 東京大学名誉教授, 歴史学)
愛宮ラサール (神父, 広島名誉市民, 上智大学, 神学)
大江健三郎 (作家)

大西 良慶 (清水寺貫首)
岡本 正直 (広島大学原爆放射能医学研究所長)
小川 岩雄 (立教大学, 物理学)
小川 政亮 (日本学術会議会員, 日本社会事業大学, 社会法学)
越智 勇一 (日本学術会議会長, 麻布獣医科大学学長, 家畜微生物学)
小野 周 (日本学術会議会員, 東京大学, 物理学)
小野 すみ (日本基督教婦人矯風会会頭)
加藤 周一 (医師, 評論家)
川田 侃 (日本平和学会会長, 上智大学, 国際関係論)
草野 信男 (前東京大学教授, 医学)
櫛田 ふき (日本婦人団体連合会会長)
具島兼三郎 (長崎大学長, 九州大学名誉教授, 国際政治学)
久保 全雄 (日本学術会議会員, 新日本医師協会幹事長)
古在 由重 (哲学)
小佐々八郎 (日本原水爆被害者団体協議会代表委員)
佐久間 澄 (広島大学名誉教授, 物理学)
里脇浅次郎 (カトリック教会長崎教区大司教)
塩月賢太郎 (日本YMCA総主事)
重藤 文夫 (前広島原爆病院院長)
上代 たの (元日本女子大学学長)
白柳 誠一 (カトリック教会東京教区大司教)
新村 猛 (名古屋大学名誉教授, 仏文学)
隅谷三喜男 (東京大学, 経済学)
関 寛治 (東京大学, 平和学)
関屋 綾子 (前日本YWCA会長)
曾田 長宗 (前国立公衆衛生院長, 社会医学)
高桑 純夫 (愛知大学, 社会思想史)
高橋幸八郎 (日本学術会議副会長, 東京大学名誉教授, 経済史)
高橋 実 (全日本民主医療機関連合会会長, 医師)
高部 益男 (放射線影響研究所〔広島〕常務理事)
武谷 三男 (物理学)
田坂 正利 (広島・福島病院院長)
田島 英三 (立教大学, 放射線物理学)
田島弥太郎 (日本学術会議会員, 日本遺伝学会会長)
田畑茂二郎 (京都府立大学学長, 国際法学)

中鉢 正美 (慶応義塾大学, 経済学)
長崎 明 (日本学術会議会員, 新潟大学, 農業工学)
中嶋 正昭 (日本キリスト教協議会総幹事)
西尾 雅七 (京都大学名誉教授, 医学)
任都栗 司 (元広島市議会議長)
野宮 初枝 (日本基督教婦人矯風会平和部長, 婦人国際平和自由連盟日本支部前会長)
畑 敏雄 (群馬大学長, 高分子化学)
服部達太郎 (埼玉県赤十字血液センター所長, 前横浜赤十字病院院長)
原田 東岷 (広島・原田外科病院院長)
檜垣 益人 (日本原水爆被害者団体協議会代表委員)
檜山 義夫 (日本学術会議会員, 東京大学名誉教授, 水産学)
平野義太郎 (国際民主法律家協会副会長, 法学)
福島 要一 (日本学術会議会員, 科学史)
藤井 日達 (日本山妙法寺山主)
伏見 康治 (日本学術会議副会長, 大阪大学名誉教授, 物理学)
槇枝 元文 (日本労働組合総評議会議長)
松井 康浩 (弁護士)
松本 金寿 (日本学術会議会員, 東北大学名誉教授, 心理学)
三上 美樹 (三重大学長, 医学)
三谷 靖 (長崎原爆病院院長)
宮城 重信 (元長崎市医師会会長, 長崎原子爆弾被害者対策協議会医療部会長)
三宅 泰雄 (日本学術会議会員, 同原子力問題特別委員会委員長, 地球化学)
三好 和夫 (徳島大学長, 医学)
森田 俊男 (日本平和教育研究協議会代表委員)
森滝 市郎 (広島大学名誉教授, 倫理学)
柳本 嘉昭 (日本青年団協議会会長)
山崎不二夫 (日本科学者会議事務局長, 東京大学名誉教授, 農業工学)
山田 英二 (金沢大学, 物理学)
山高しげり (全国地域婦人団体連絡協議会会長)
行宗 一 (日本原水爆被害者団体協議会代表委員)
吉野源三郎 (ジャーナリスト, 評論家)



広島準備委員会

代表委員会

- 会長
飯島 宗一 (広島大学)
- 副会長
相原 和光 (広島YMCA総主事)
今堀 誠二 (広島大学)
庄野 直美 (広島女学院大学)
原田 東岷 (病院長)

代表委員

- 相原 和光
飯島 宗一
今田 正義 (県労議長)
今堀 誠二
内海 巖 (広島大学名誉教授, ユネスコ協会)
戎崎 始成 (地方同盟議長)
大北 威 (広島大学)
大曾根哲夫 (マツダ労連議長)
岡本 直正 (広島大学)
加藤 新一 (地球市民の会代表)
桑原 英昭 (世界連邦建設同盟代表)
小黑 薫 (広島女学院大学学長)
佐久間 澄 (広島大学名誉教授)
迫 千代子 (婦人国際平和自由連盟代表)
重藤 文夫 (前原爆病院長)
志水 清 (原爆養護ホーム所長)
庄野 直美
隅田 哲司 (広島修道大学学長)
関 寛治 (広島大学)
高部 益男 (放射線影響研究所常務理事)
宅和 純 (広島平和教育研究所理事長)
竹山 晴夫 (広島大学学長)
田坂 正利 (病院長)

- 谷本 清 (ピースセンター代表)
任都栗 司 (広島市会議員)
原田 東岷
松垣 益人 (日本原水爆被害者団体協議会代表委員)
丸山 益輝 (広島大学)
村上 忠敬 (金城学院大学)
森滝 市郎 (広島大学名誉教授)

幹事会 (*印=代表幹事)

募金委員会

- 相原 和光*
荒滝 文子 (県新婦人の会会長)
伊藤サカエ (県被団協理事)
加藤 新一
河村虎太郎 (病院長)
久保 正直 (被爆者の会会長)
迫 千代子
瀬戸 高行 (県労事務局長)
三宅 登 (県平和委員会副会長)
山田 敬子 (日本婦人会議会長)
山根 実人 (マツダ労連書記長)
李 実根 (朝被協代表委員)

財政委員会

- 岩淵 泰夫 (県商団連事務局長)
宅和 純
土居 一夫 (県労副議長)

広報委員会

- 石川 俊彦 (県労被爆連会長)
大森 正信 (広島大学)
尾野 展昭 (広島修道大学)
北西 允 (広島大学)
迫田 正利 (広島地区労会議議長)

- 横山 英 (広島大学)
- 総務委員会**
- 椎木 剛 (県青連会長)
- 坪島 公一 (社青同地区本部委員長)
- 藤崎 徳雄 (県労副議長)
- 藤田 厚吉 (国連代表派遣県実行委幹事)
- 山田 敏輝 (民青県委員長)
- 渉外委員会**
- 飯島 宗一*
- 今堀 誠二*
- 川岸 孝司 (日本山妙法寺)
- 佐久間 澄
- 原田 東岷*
- 古田 文和 (県被団協事務局次長)
- M・マックミラン (広島女学院大学)
- 村上 忠敬
- 森滝 市郎
- 遊川 和良 (全電通被爆二世協議会代表)
- 専門委員会**
- 阿波 章夫 (放射線影響研究所)
- 石田 明 (広島平和教育研究所事務局長)
- 石田 定 (原爆病院内科部長)
- 大原三八雄 (広島工業大学)
- 熊田 重克 (中国新聞論説委員)
- 栗原 登 (広島大学)
- 小寺初世子 (広島女子大学)
- 田坂 正利 (病院長)
- 永井 滋郎 (広島大学, ユネスコ協会)
- 丸山 益輝
- 山田 浩 (広島大学)
- 湯崎 稔 (広島大学)
- 会計監査**
- 相良 勝美 (弁護士, 県原水協事務局次長)
- 福永 久美 (地方同盟書記長, 核禁会議事務局次長)
- 宮崎 安男 (全電通地方支部委員長, 県原水禁事務局次長)
- スポークスマン**
- 庄野 直美
- 後藤 利行 (県労事務局次長)
- 藤本 幸作 (県平和委員会事務局長)

事務局代表

庄野 直美

後藤 利行

藤本 幸作

山内 義治 (服飾デザイナー)

専門委員会 (*印=責任者)**自然科学委員会**

相坂 忠一 (病院長)

阿波 章夫

飯島 宗一

石田 定*

上岡 洋史 (広島大学)

大北 威

岡本 直正

加藤 寛夫 (放射線影響研究所)

鎌田 七男 (広島大学)

蔵本 淳 (広島大学)

栗原 登

佐久間 澄

志水 清

庄野 直美

杉原 芳夫 (広島大学)

杉本 茂憲 (病院長)

高部 益男*

竹下 健児 (広島大学)

田坂 正利

戸田慎太郎 (病院長)

浜田 忠雄 (放射線影響研究所)

原田 東岷

広瀬 文男 (広島大学)

務中 昌巳 (広島大学)

山本 務 (放射線影響研究所)

医学調査委員会

石田 定

栗原 登

高部 益男

田坂 正利

原田 東岷*

社会科学委員会

阿佐美信義 (弁護士)

今堀 誠二

宇吹 暁 (広島大学)

大西 典茂 (広島女学院大学)

北西 允

久保 良敏 (広島大学)

小寺初世子

芝田 進午 (広島大学)

田村 和之 (広島大学)

外山 佳昌 (弁護士)

森滝 市郎

山田 浩

山本 鎮雄 (広島女子大学)

湯崎 稔* (広島大学)

平和教育・マスメディア委員会**(平和教育)**

石田 明*

大槻 和夫 (広島大学)

佐藤 正夫 (広島大学名誉教授)

荘司 雅子 (広島大学名誉教授)

空 辰男 (広島平和教育研究所)

永井 滋郎

永井 秀明 (広島大学)

藤井 敏彦 (広島大学)

松元 寛 (広島大学)

森下 弘 (広島平和教育研究所)

横山 英

(社会教育)

内田恵美子 (広島大学)

宇吹 暁

大野 允子 (児童文学者)

大原三八雄*

熊田 重克

栗原 貞子 (詩人)

田辺耕一郎 (評論家)

深川 宗俊 (詩人)

被爆者調査委員会 (一般・生活史)

石田 定

宇吹 暁

大森 正信

岡本 直正

河合 幸尾*

北西 允

栗原 登

小寺初世子

佐久間 澄

志水 清

高部 益男

田坂 正利

原田 東岷

丸山 益輝*

三村 正弘 (ケースワーカー)

森滝 市郎

山田 浩

山本 鎮雄

湯崎 稔

長崎準備委員会

代表幹事

秋月辰一郎（聖フランシスコ病院医長）
具島兼三郎（長崎大学長）
小佐々八郎（日本原水爆被害者団体協議会代表委員）
里脇浅次郎（カトリック教会長崎教区大司教）
田口 健二（長崎県労働組合評議会議長）
三谷 靖（長崎原爆病院院長）
宮城 重信（元長崎市医師会会長）

自然科学委員会

東 幹夫（長崎大学）
内田 伯（松山町原爆復元の会）
大橋 裕（長崎大学）
岡島 俊三（長崎大学）
岡林 隆敏（長崎大学）
小西 良士（長崎大学）
塩見 敏男（長崎大学）
三浦 博史（長崎大学）

医学・医療委員会

市丸 道人（長崎大学）
岩永 光治（十善会病院）
河本 定久（放射線影響研究所）
北村 勉（長崎大学）
貞森 直樹（長崎大学）
鮫島 千秋（鮫島耳鼻咽喉科）
柴田 晃毅（長崎原爆病院）
鈴木 達二（長崎大学）
鈴木 良平（長崎大学）
高岡 善人（長崎大学）
高久 功（長崎大学）

田口 厚（長崎原爆病院）
武居 洋（長崎大学）
辻 泰邦（長崎大学）
土山 秀夫（長崎大学）
哲翁 昭邦（哲翁内科医院）
富田 満夫（大浦診療所）
西森 一正（長崎大学）
野口 恭一（長崎原爆病院）
福井 順（福井病院）
藤原 直子（長崎原爆病院）
松田 源治（長崎大学）
三原 茂（長崎市民病院）
山下 兼彦（大浦診療所）
山辺 徹（長崎大学）
横内 寛（国立長崎中央病院）

人文・社会科学委員会

相沢 龍（長崎造船大学）
赤瀬 守（中島川を守る会）
有村 晃（長崎YMCA）
岩松 繁俊（長崎大学）
内田 伯
大窪 徳行（長崎造船大学）
片寄 俊秀（長崎造船大学）
鎌田 定夫（長崎造船大学）
河地 貫一（長崎大学）
川原紀美雄（長崎県立国際経済大学）
木戸 利一（長崎保健看護学校）
熊谷 悟郎（弁護士）
近藤 嘉昭（長崎県立国際経済大学）
高橋 真司（長崎造船大学）
高橋 良（長崎大学）
田吉 チエ（フレンドシップサービスセンター）

鶴田千代子（活水女子短期大学）
土岐 やす（日本基督教婦人矯風会）
栃木 利夫（長崎造船大学）
中里 喜昭（作家）
仲田 正機（長崎県立国際経済大学）
日比野正巳（長崎造船大学）
藤村 紀隆（日本山妙法寺）
松岡 瑞典（日本山妙法寺）
山田 かん（詩人）
横山 茂樹（長崎弁護士会）

平和教育委員会

今田 斐男（長崎平和教育研究会）
岡村 進（長崎の証言の会）
鎌田 定夫
坂口 便（日本平和教育研究協議会）
高橋 真司
築城 昭平（長崎県原爆被爆教師の会）
栃木 利夫
浜崎 均（長崎の証言の会）
古川 原（長崎造船大学）
山川 剛（長崎平和教育研究会）

調査委員会

荒木 正人（長崎市原爆資料課長）
岩永 光治

鮫島 千秋
富田 満夫
葉山 利行（長崎原爆被災者協議会）
福井 順
三原 茂
山下 兼彦
山本 和明（長崎の証言の会）

広報委員会

植田 カツエ（鎮西学院短期大学）
大角 良人（長崎造船大学）
小池 スイ（長崎県婦人団体連合会）
小林 ヒロ（長崎県婦人団体連合会会長）
杉本 亀吉（原爆遺族会会長）
関口 良雄（長崎平和教育研究会）
広瀬 方人（高校被爆教師の会）

組織・運営委員会

岩間 隆正（印刷業）
川原 隆（長崎県労働組合評議会事務局長）
城戸智恵弘（長崎県職員組合本部委員長）
古賀 愛（長与町身体障害者福祉協議会会長）
小西 良士
坂井孟一郎（香焼町町長）
葉山 利行

NGO 被爆問題シンポジウム推進団体連絡会議

(「シンポジウム日本準備委員会の機構と役員」の項でのべた「日本NGO共同主催委員会」にあたるもの)

世話人代表

天池 清次 (全日本労働総同盟会長)
 新村 猛 (名古屋大学名誉教授)
 関屋 綾子 (日本YWCA同盟前会長)
 中林 貞男 (日本生活協同組合連合会会長)
 槇枝 元文 (日本労働組合総評議会議長)
 壬生 照順 (核兵器廃絶をめざす宗教者NGO連絡会議)
 柳本 嘉昭 (日本青年団協議会会長)
 山高しげり (全国地域婦人団体連絡協議会会長)

加盟団体

(労働)
 日本労働組合総評議会
 全日本労働総同盟
 中立労働組合連絡会議
 日本国家公務員労働組合連合会
 日本高等学校教職員組合
 日本原子力研究所労働組合
 日本社会事業大学労働組合

(婦人)
 全国地域婦人団体連絡協議会
 日本婦人団体連合会
 日本YWCA同盟
 婦人国際平和自由連盟日本支部
 日本基督教婦人矯風会
 日本看護協会
 主婦連合会
 日本子どもを守る会
 日本婦人法律家協会
 新日本婦人の会
 婦人民主クラブ再建連絡会

(市民・法律)

日本生活協同組合連合会
 全国商工団体連合会
 全日本民主医療機関連合会
 日本国際法律家連絡協会
 自由法曹団

(宗教)

キリスト者日本友和会
 キリスト友会日本年会
 日本キリスト者平和の会
 全キリスト者平和会議JC
 アジア仏教徒平和会議JC
 日本山妙法寺
 立正平和の会
 丸山平和の会
 人類愛善会
 天理教靖国神社問題特別委員会
 核兵器廃絶をめざす宗教者NGO連絡会議
 世界宗教者平和会議JC
 日本宗教者平和協議会
 宗教青年平和協議会

(青年・学生)

日本青年団協議会
 日本民主青年同盟
 社会主義青年同盟
 日本ユネスコ学生連盟
 全日本学生自治会総連合
 全国医学生自治会連絡会議
 全日本学生寮自治会連合
 全国大学生生活協同組合連合会
 全国教育系学生ゼミナール
 中央合唱団

(平和・友好)

世界連邦建設同盟
 日本平和委員会
 アムネスティ・インターナショナルJC
 日本原水爆被害者団体協議会
 第五福竜丸平和協会
 広島平和教育研究所
 日ソ協会
 日本ベトナム友好協会

(学会)

日本科学者会議
 日本地球化学会
 日本海洋学会

(個人、その他)

市川 房枝
 野々村

オブザーバー

全国電力労働組合連合会
 全国農業協同組合労働組合連合会
 全建設省労働組合東京地方本部
 岩波労組
 草の実会
 被爆問題を考える婦人集会
 青年法律家協会
 横浜磯子協会
 平和のために手をつなぐ会
 猿橋他9名
 東大駒場教職員
 若い研究者の会
 法務省宮崎支部



都道府県シンポジウム推進(支持)委員会

名称，設立月日，代表者名，およびシンポジウムの成果普及のための刊行物名のみを掲載した。刊行物についてはタイプまたは活版印刷の冊子状のもので，日本準備委員会に寄せられたものに限定した。設立月日および刊行物発行日で年の記載のないものはすべて1977年である。

シンポジウムを支持し，成功させるための北海道推進委員会（4月18日設立）

代表幹事

田中 一（北海道大学，日本学術会議会員）
荻原 栄松（北海道原爆被害者団体協議会会長）
藤井 敬三（医師）
松浦 一（北海道大学名誉教授）

シンポジウム 青森県推進委員会（4月28日設立）

よびかけ人代表

十川 幸司（青森県原爆被害者の会会長）
長内 邦夫（青森県民主医療機関連合会会長）
手代木 渉（弘前大学）
鈴木 清竜（青森県国民教育研究所所長）
安井 達夫（八戸水産研究所所長）

シンポジウム 岩手県推進委員会（5月14日設立）

代表幹事

上田 仲雄（岩手大学）
小野 一男（盛岡赤十字病院院長）
斉藤 義雄（岩手県原爆被害者団体協議会会長）
瀬川 岩雄（曹洞宗岩手県宗務所所長）
足沢三之介（岩手労災病院院長）
中村 良雄（川久保病院院長）
安田 純夫（岩手県原爆被爆者福祉協会会長）
柳沢 融（岩手医科大学）

シンポジウム 宮城県推進会議（4月9日設立）

代表委員

小嶋 逞文（宮城県原爆被害者の会会長）
高橋 実（医師）
西田 周作（東北大学名誉教授）
服部 文男（東北大学）

早坂 四郎（国連要請代表派遣宮城県実行委員会代表委員）

河本 隆夫（牧師，日本基督教団）
『被爆者とともに核兵器のない世界を』（B5，64ページ，タイプ，600円，11月9日）

シンポジウム 秋田県推進委員会（3月19日設立）

代表委員

加納 博（秋田大学）
中谷敏太郎（中通リハビリテーション病院院長，秋田県原爆被害者団体協議会会長）

シンポジウム 山形県推進委員会（7月7日設立）

よびかけ人

阿部 功（田川地区被爆者の会会長）
佐藤 利美（山形県原爆被害者団体協議会会長）
新関 虚雲（建昌寺住職）
本間 誠（本間病院院長）
真壁 仁（詩人）
松沢 信五（至誠堂総合病院院長）
森田 浩（山形大学）

シンポジウム 福島県推進委員会（6月18日設立）

よびかけ人代表

板橋 俊子（福島YWCA会長）
角田 武雄（福島大学名誉教授）
小林 喜成（日本基督教団信夫教会牧師）
宗像 久嘉（福島県原爆被害者協議会会長）
和田 甫（元福島大学教育学部長）
渡辺源次郎（福島大学長）
『被爆者とともに核兵器完全禁止を』（B5，48ページ，タイプ，300円，12月28日）

シンポジウムを支持する茨城県民の会
（7月23日設立）

世話人

草壁 泰之（茨城キリスト教短期大学学長）
小林 三衛（茨城大学）
鶴田 孫一（茨城県原爆被害者協議会会長）
中島篤之助（日本原子力研究所，日本学術会議会員）
皆川 きよ（茨城県地域婦人団体連絡会会長）

シンポジウム 群馬県推進委員会（5月28日設立）

代表推進委員

吉永 清（群馬大学名誉教授）

シンポジウム 埼玉県推進委員会（7月19日設立）

代表幹事

栗屋 豊（埼玉大学名誉教授）
『NGO被爆問題国際シンポジウム報告集』（タブロイド判，4ページ，活版，10月20日）

シンポジウム 千葉県推進委員会（3月5日設立）

代表委員

片野 光雄（千葉県原爆被爆者友愛会会長）
山本 正雄（日本福祉大学）

シンポジウム 東京推進委員会（4月16日設立）

よびかけ人代表

片岡 強（東京都原爆被害者団体協議会会長）
『原爆と人間』（B5，24ページ，タイプ，300円，10月10日）
『東京の被爆者——'77年被爆者調査のまとめ』（B5，108ページ，活版，1,200円，1978年7月28日）

シンポジウム 神奈川県推進委員会（4月30日設立）

代表幹事

飯田 耕作（神奈川県学学長）
岡崎 晃（日本基督教団大船教会牧師）
貝山 宣泰（日蓮宗本覚寺住職）
田村 清（神奈川県保険医協会会長）
富田 静子（横浜YWCA理事長）
長尾 正良（神奈川県平和委員会会長）
森川 定実（神奈川県原爆被災者の会会長）
『被爆の実相を全県民のものに』（B5，27ページ，タイプ，200円，11月26日）

シンポジウム 新潟県支持委員会（5月8日設立）

代表委員

伊藤 岩（新潟大学）
北村 四郎（新潟大学学長）
是沢 三郎（新潟大学教育学部長）
千田 数雄（新潟県原爆被害者の会会長）
土屋 恒磨（大谷派真浄寺住職）
長崎 明（新潟大学，日本学術会議会員）
野本 祥治（新潟大学法文学部長）
坂東 克彦（新潟県弁護士会会長）
布施 栄信（県立ガンセンター新潟病院院長）
松井 愛美（日本基督教団関東地区新潟地区長，十日町教会神父）

村川新十郎（新潟大学）
山田 豊一（新潟大学農学部学長）
横田伊佐秋（新潟大学）
渡辺 敬一（新潟大学，日本学術会議会員）
『被爆——新潟県における被爆者の実情とその訴え』（B5，32ページ，タイプ，10月23日）

シンポジウム 富山県推進委員会（6月22日設立）

代表委員

稲葉 心田（大本山国泰禅寺管長）
庵 勝運（大谷派富山別院輪番）
伊藤 信義（日本聖公会富山聖マリア教会牧師）
植木 忠夫（富山大学名誉教授）
長野 隆法（富山本願寺輪番）
林 勝次（富山大学学長）
引地登志男（被爆者）
平松 博（富山医科薬科大学学長）
前田 亮助（富山県弁護士会会長）
松本 賢一（富山大学）
柳田 友道（富山大学）
米村 長敏（富山赤十字病院院長）

シンポジウム 石川県推進委員会（2月27日設立）

代表幹事

岩佐 幹三（金沢大学，石川県原爆被災者友の会会長）
清水 正明（石川県原爆被災者友の会副会長）
山田 英二（金沢大学）
『被爆問題国際シンポジウム報告書——原爆は人間に対して何をし 人間は原爆に対して何をなすべきか』（B5，35ページ，タイプ，10月31日）

シンポジウム 福井県支持委員会（7月24日設立） よびかけ人

石黒 正（被爆者，金津保健所管内）
 宇野 進（日本キリスト教団敦賀教会牧師）
 亀井 賢伍（被爆者，福井保健所管内）
 河合 武夫（被爆者，敦賀保健所管内）
 猿橋 ユリ（福井県連合婦人会会長）
 嶋田 正（福井大学）
 鈴木 格一（福井大学）
 竹内 謙二（福井県高等学校教職員組合委員長）
 時岡 孝史（福井県原爆被害者団体協議会会長，小浜保健所管内）

長谷川汪示（福井県教職員組合委員長）
 春田 義正（福井東別院輪番）
 福澤 英達（福井西別院輪番）
 前田 勝見（被爆者，大野保健所管内）
 増田太左衛門（福井県連合青年団団長）
 茂呂 實（福井大学）

シンポジウムを支持し，推進する山梨県準備委員会（6月3日設立）

代表幹事

磯貝 正義（山梨大学教育学部長）
 帯野喜一郎（弁護士）
 河口 忠雄（国立甲府病院前院長）
 佐々木悟史（宗教家）
 高橋 健（山梨県原水爆被害者の会会長）
 高橋 昇（山梨大学工学部長）
 高野孫左衛門（山梨YMCA理事長）

『I S D A——山梨県における被爆者の実情とその訴え』（B 5，26ページ，タイプ，1978年7月1日）

シンポジウム 長野県推進委員会（4月29日設立）

代表幹事

加藤 静一（信州大学長）
 黒田 吉益（信州大学，日本学術会議会員）
 鈴木 鳴海（上田女子短期大学学長）
 隅田隆太郎（信州大学）
 高野 イシ（長野県連合婦人会会長）
 半田 孝淳（長野県仏教会副会長，北向観音本坊常楽寺住職）
 前座 良明（長野県原水爆被災者の会会長）
 山岡 利七（信州大学）

若月 俊一（長野県厚生連佐久総合病院院長） シンポジウムを支持し，推進する岐阜県推進委員会（6月25日設立）

代表幹事

臼井 一二（岐阜県原爆被災者福祉会会長）
 江口 三五（岐阜県ユネスコ協会会長，弁護士）
 小笠原重二（牧師）
 高山 竜溪（大谷派岐阜別院輪番）
 山本 堯（岐阜大学）
 シンポジウムを支持・推進する静岡県民の会（7月16日結成）

代表幹事

大蔵 敏彦（弁護士）
 小笠原英三郎（静岡大学名誉教授）
 勝又 武一（静岡県労働組合評議会議長）
 加藤 一夫（静岡大学）
 杉山 秀夫（静岡県原水爆被害者の会会長）
 松村 寿顕（蓮永寺住職・元静岡県仏教会会長）
 松谷 被鎧（日本山妙法寺）
 望月 誼三（静岡大学名誉教授）
 渡辺 晋（一番町教会牧師）
 『1977年静岡における被爆の実相とその後遺・被爆者の実情 その1』（B 5，35ページ，タイプ，300円，8月2日）

シンポジウムを支持し，推進する愛知県準備委員会（7月13日設立）

代表幹事

浅賀 ふさ（日本福祉大学名誉教授）
 有山 兼孝（名古屋市立女子短期大学学長）
 石井 重夫（愛知県原水爆被災者の会理事長）
 石塚 直隆（名古屋大学長）
 坂倉 謙三（東邦学園短期大学学長）
 新村 猛（名古屋大学名誉教授）
 高桑 純夫（愛知大学）

シンポジウム 三重県準備委員会（6月23日設立）

代表よびかけ人

荒井 瑞雄（三重大学名誉教授）
 三上 美樹（三重大学学長）
 山浦 久二（医師）

シンポジウム 滋賀県推進委員会（5月2日設立）

代表幹事

小寺 博（滋賀県被爆者友の会会長）
 西村 関一（世界連邦建設同盟）
 福家 俊明（園城寺長吏）
 三輪 健司（滋賀県立短期大学学長）

シンポジウム 京都推進委員会（4月26日設立）

代表委員

大西 良慶（北法相宗【清水寺】管長）
 信ヶ原良文（浄土宗壇王法林寺住職）
 寿岳 しづ（英文学者）
 新村 猛（橘女子大学学長）
 住谷 悦治（同志社大学前総長）
 田畑茂二郎（京都府立大学学長）
 西尾 雅七（京都大学名誉教授）
 二葉 憲香（竜谷大学学長）
 細野 武男（立命館大学総長）
 米沢以美子（京都府連合婦人会会長）
 松本 大圓（北法相宗【清水寺】宗務総長）
 木下 義次（京都教職員組合委員長）

『被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム報告集』（B 5，42ページ，タイプ，11月27日）

シンポジウム 大阪推進委員会（3月30日設立）

代表委員

貞永 正弘（大阪府原爆被害者団体協議会理事長）
 中路 実（医師，大阪民主医療機関連合会会長）

シンポジウム 兵庫県推進委員会（3月30日設立）

代表幹事

大川 義篤（牧師）
 置塩 信雄（神戸大学）
 北山 六郎（弁護士）
 三木 森治（兵庫県原爆被害者連絡協議会）
 湧谷 煌（医師）
 『被爆者は訴える——ヒロシマ・ナガサキ 32 年』（B 5，24ページ，タイプ，12月3日）

シンポジウム 奈良県推進委員会（7月22日設立） 推進委員14名，支持協力者16名で構成。代表者を設けなかった。

シンポジウム 和歌山県推進委員会（5月5日設立）

代表幹事

北 一夫（民俗学者）
 広橋 次郎（和歌山大学）

シンポジウム 鳥取県推進委員会（5月7日設立）

代表委員

近藤 久子（鳥取県連合婦人会会長）
 中尾 義信（鳥取県原爆被害者の会会長）
 福士 俊一（鳥取大学）
 山上 英明（生協病院院長）
 山崎 季治（弁護士）

『世界のヒバクシャよ，団結せよ 輝やかなしい未来はわれわれのものである／「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム」報告と鳥取県内被爆者の実情』（B 5，26ページ，タイプ，1978年6月15日）

シンポジウム 島根県推進委員会（5月18日設立）

代表世話人

岩佐 昌紀（日本キリスト教団牧師）
 大島 勇（島根県原爆被害者の会会長）
 内藤 正中（島根大学）
 法橋 承德（島根県教職員組合執行委員長）
 『島根県原爆被害調査報告 1977 被爆の実相とその後遺・被爆者の実情』（B 5，56ページ，300円，1978年3月）

シンポジウム 岡山県支持委員会（5月1日設立）

代表委員

佐藤 義信（水島協同病院院長，岡山県民主医療機関連合会会長）

シンポジウム 山口県推進委員会（4月23日設立）

代表幹事

安部 一成（山口大学経済学部部長）
 『山口のヒロシマ第Ⅱ集 被爆・その後 山口県原爆被爆者実態調査報告書』（A 5，125ページ，活版，10月20日）

シンポジウム 徳島県推進委員会（5月12日設立）

代表委員

鏡 登（平和活動家）
 佐藤 孝義（牧師）
 杉田 治郎（健生病院院長）
 高橋 博（徳島県原爆被害者友の会会長）
 松本 光弘（徳島大学）

シンポジウム 香川県推進委員会（4月15日設立）

代表幹事

小川 篁（ルカ病院院長）

木暮 秩 (香川大学)
 野町 良夫 (日本キリスト教団屋島教会牧師)
 シンポジウム 愛媛県推進委員会 (5月14日設立)
 代表幹事
 入江 奨 (松山商科大学)
 大嶋 信二 (日本基督教団番町教会牧師)
 久保 伸子 (愛媛県原爆被害者の会会長)
 沢田 允明 (愛媛大学)
 山本 司 (山本司内科院長)
 シンポジウム 高知県推進委員会 (4月7日設立)
 代表幹事
 安藤 敏幸 (高知女子大学)
 大久保正勝 (興隆寺住職)
 上村 登 (高知学園短期大学学長)
 加藤 徹 (高知大学農学部学部長)
 坂井 英一 (旭診療所所長)
 坂本 九郎 (浦戸湾を守る会)
 谷 信男
 西沢 弘順 (高知大学文理学部学部長)
 橋本 亘 (南与力町教会)
 東元善次郎 (元高知県教組委員長)
 藤戸 せつ (藤戸病院)
 藤原 周 (弁護士)
 松岡 稔 (高知県原爆被害者の会会長)
 松田 範良 (高知県宗教者平和協議会副会長)
 八塚 剛 (高知大学)
 山岡 亮一 (高知大学学長)

吉川 潔 (高知大学教育学部学部長)
 シンポジウム 福岡県推進委員会 (4月9日設立)
 代表委員
 古賀 武夫 (元西南大学学長)
 高比良治郎 (福岡県原爆被害者団体協議会会長)
 近沢 敬一 (福岡大学)
 森 茂康 (九州大学)
 『ノーマア・ヒバクシャ——福岡県原爆被害者実態調査報告書』(B5, 82ページ, タイプ, 1978年5月20日)
 シンポジウム 佐賀県推進委員会 (7月16日設立)
 事務局長
 川崎十四三 (佐賀大学)
 シンポジウム 大分県推進委員会 (6月13日設立)
 代表幹事
 荒巻 逸夫 (大分赤十字病院院長)
 姫野 良平 (アドバンス大分社長)
 山田都美子 (原爆被害者大分協議会)
 シンポジウム 鹿児島県推進委員会 (7月27日設立)
 代表幹事
 大山 毅 (日本山妙法寺)
 瀬戸内末政 (鹿児島県原爆被害者協議会)
 千葉 周伸 (医師)
 西岡 久頼 (鹿児島大学)
 東 孝一郎 (鹿児島県青年団体協議会会長)
 棕 鳩十 (作家)
 米山トモエ (鹿児島県婦人連絡協議会会長)

シンポジウムのプログラム

第1段階

国際調査 (東京・広島・長崎)
 7月21日 国際側専門家来日
 22日 国際調査団第1回総会 (東京・学士会館)
 記者会見 (東京・学士会館)
 23日 東京出発, 広島到着
 原爆慰霊碑を訪問
 記者会見 (広島・平和記念資料館)
 24日 国際調査団の広島での初会合——自然科学グループ, 社会科学グループにわかれて会合し, 作業文書についての検討と討論を行なう (広島YMCA)
 被爆者との会合 (広島YMCA)
 25日 平和記念資料館, 放射線影響研究所 (広島), 原爆養護ホームを訪問
 26日 広島出発, 長崎到着
 記者会見 (長崎グランドホテル)
 長崎準備委員会主催レセプション (長崎グランドホテル)
 27日 国際調査団会合 (長崎大学医学部)
 長崎大学医学部付属原爆後障害医療研究施設, 長崎原爆病院, 放射線影響研究所 (長崎) を訪問
 被爆者との会合
 28日 長崎国際文化会館 (原爆資料センター) を訪問
 記者会見
 長崎市主催の昼食会
 長崎出発, 広島到着
 29日 自然科学グループ, 社会科学グループの最終会合 (広島YMCA)
 国際調査団第2回総会——自然科学グループおよび社会科学グループの各報告書を調査団全体として受理 (広島YMCA)
 作業文書Vを検討する小委員会の会合 (広島

グランドホテル)
 30日 国際準備委員会と日本準備委員会の合同会議 (広島YMCA)
 運営委員会 (第2段階) 第1回会議 (広島YMCA)
 記者会見 (広島グランドホテル)
 広島県知事・広島市長主催による国際側専門家のためのレセプション (広島グランドホテル)

第2段階

NGOと研究機関のシンポジウム (広島県医師会館)
 7月31日
 午前 総会
 国際準備委員会報告 (アーサー・ブース)
 開会の挨拶 (ショーン・マクブライド)
 歓迎の挨拶 (飯島宗一)
 広島県知事挨拶 (宮沢弘)
 広島市長挨拶 (荒木武)
 長崎市長挨拶 (諸谷義武)
 イラク国務大臣 (世界平和会議) の挨拶 (アメル・アブドラー)
 ユネスコ事務局長のメッセージ (ショーン・マクブライド代読)
 日本学術会議会長のメッセージ (小野周代読)
 その他のメッセージ (アーサー・ブースがリストを発表)
 国際調査団自然科学グループの報告書を発表 (ジョセフ・ロートブラット)
 国際調査団社会科学グループの報告書を発表 (アレクサンドル・カリアディン)
 被爆者調査 (一般・医学・生活史) の概要報告 (浜谷正晴)
 被爆者代表の訴え (伊東壮)

午後 分科会 (パラレル)

- 第Ⅰ分科会 原爆の医学的・遺伝的影響・後遺
第Ⅱ分科会 原爆の社会的影響、とくに被爆者問題
第Ⅲ分科会 情報の普及、宣伝、平和教育
第Ⅳ分科会 核兵器の廃絶、放射能からの人類の防護 (NGOの役割)

起草委員会第1回会議

夕 晩餐会 (広島国際ホテル)

8月1日

- 午前 分科会
午後 分科会

8月2日

- 午前 総会
各分科会の総括報告者による要約報告
一般討論
起草委員会第2回会議
午後 映画上映「広島―原爆の記録」
運営委員会第2回会議

夕 総会

- シンポジウム第2段階の報告書の採択 (提案者マリアン・ドプロシェスキー)
長崎準備委員会挨拶 (秋月辰一郎)
日本原水爆被害者団体協議会挨拶 (行宗一)
シンポジウム宣言の採択 (提案者フィリップ・ノエル＝ベーカー)
閉会の挨拶 (フィリップ・ノエル＝ベーカー)
記者会見 (広島グランドホテル)

第3段階

ラリー (広島、長崎)

8月5日

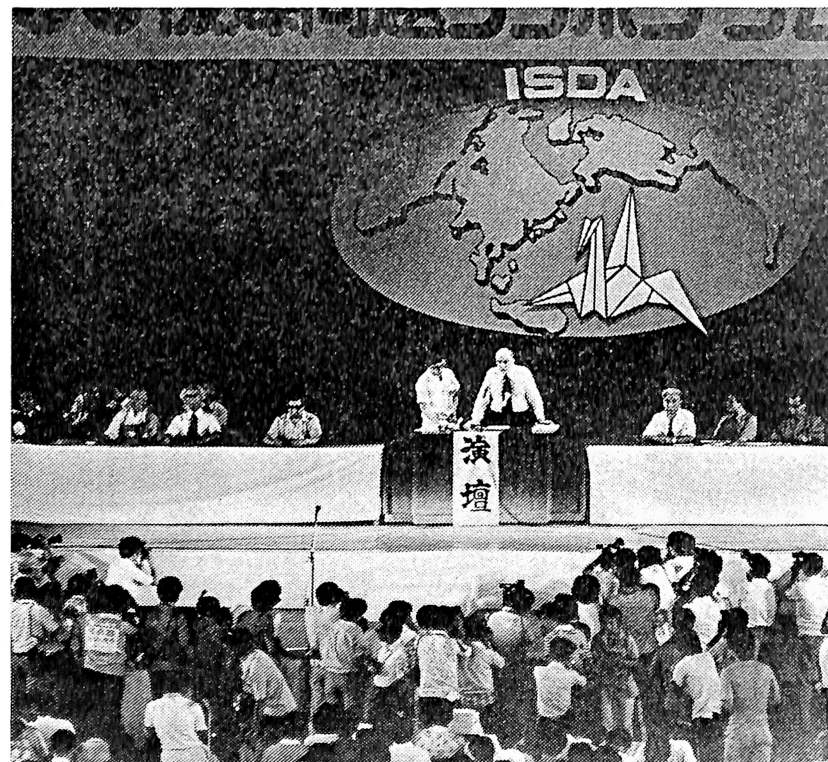
午後 広島ラリー (広島県立体育館)

8月8日

夕 長崎ラリー (長崎市民会館体育館)

8月9日

午前 記者会見 (長崎準備委員会事務所)
プレスリリース発表



広島ラリーで挨拶をのべるショーン・マクブライド氏

International Symposium on the Damage and After-Effects of the Atomic Bombing of Hiroshima and Nagasaki

被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム

International Preparatory Committee
% International Peace Bureau,
41, rue de Zurich, CH-1201, Geneva,
SWITZERLAND.
Telephone: (022) 31 64 29
Cable: PEACEBUREAU GENEVE
President: Seán MacBride, S.C.
Chairman: Arthur Booth

Japan National Preparatory Committee
% Prof. Yasuo Miyake,
4-29-2-217, Koenji-Kita,
Suginami-ku,
Tokyo, 166, JAPAN
Cable: HIROSHIMASYMPO TOKYO
Representative Director: Yasuo Miyake

招 請 状

1977年3月5日 東京

1977年3月9日 ジュネーブ

親愛なる友人のみなさん、

本招請状は、1977年7月31日から8月2日まで広島で開催される、被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウムに、貴殿 (貴組織) を公式にお招きするものであります。

このNGOのシンポジウムは、国際平和ビューローのイニシャチブのもとで、国際非政府諸組織 (NGO) と日本のNGOの共同した行動によって、それぞれ、1977年1月28日ジュネーブおよび1976年12月18日東京の会合で設立された、国際準備委員会 (IPC) および日本準備委員会 (JNPC) の共同努力によって組織されるものです。

その目的は、1976年2月にジュネーブのNGO軍縮特別委員会第21回会議で採択された原子爆弾の被害者に関する特別決議を実行することであり、なお、同決議は本状に同封した小冊子の中に収められています。

ヒロシマとナガサキはひじょうにしばしば、すぐに忘れられる不幸な歴史上の事件と見なされています。このシンポジウムの第1の目的は、原爆の被害とその後遺を全体的に明らかにし、生き残っている原爆被害者の苦しみと訴えを全世界に伝え、そしてこれらのことを通じて核兵器廃絶の方向へ世論を動員することです。原爆による破壊の物理的・医学的側面に加えて、現在の原爆被害者の社会的な苦しみ、このシンポジウムの重要な主題となります。第2の目的は、核兵器の開発によってひきおこされる環境破壊の実情を明らかにし、この点について世論に警告を発することです。このようにして軍備撤廃に人間の顔をあたえることによって、私たちは軍備撤廃にたいするもっともよく認められた障害物のひとつである無感動と幻滅感から抜け出すことができるかもしれません。

私たちが貴殿 (貴組織) をお招きしているNGOのシンポジウムは実は、国際シンポジウム全体の第2段階で

あり、それにひきつづいて、JNPCの責任で、8月5日および8日にそれぞれ広島および長崎で、大衆報告集会 (第3段階) が開催されることになっています。

NGOのシンポジウムは、それに先だって、国際側および日本側メンバーからなる専門家調査団によって行なわれる国際調査 (第1段階) の報告を受け、その調査結果を、原爆被害者の援護と核兵器禁止運動のために、ひろく知らせるためのもっともよい方法を決定するでしょう。

シンポジウムに関する、プログラム、3つの各段階の議事事項、準備作業のタイムテーブル、その他の情報も、同封の小冊子に収められています。

貴殿 (貴組織) は、すでに動き出しており、1977年のもっとも重要な事件のひとつになるかもしれない計画、現在の原爆被害者の実情について世論に警告することによって軍備のない世界をめざすいっそう広範な運動の前進に資するであろう計画に加わり、助力するよう招かれているのです。この計画は、とりわけ、1978年5～6月に予定されている国連軍縮特別総会とのかかわりにおいて、現時点で重要であります。

貴殿 (貴組織) が私たちの計画に加わりこのシンポジウムに参加していただけるかどうかについて、本状についている切り取り用紙を用いてお知らせいただければたいへんうれしく存じます。

みなさんの親切なご配慮にたいし感謝の念をこめて、
敬具

Arthur Booth Y. Miyake

アーサー・ブース
国際準備委員会議長

三宅泰雄
日本準備委員会代表幹事

**SPECIAL NGO COMMITTEE ON DISARMAMENT
COMITÉ SPÉCIAL DES ONG POUR LE DÉSARMEMENT
COMITE ESPECIAL ONG DE DESARME**

PRÉSIDENT :
Mr J. DUNCAN WOOD

SECRÉTARIAT
BUREAU INTERNATIONAL DE LA PAIX
RUE DE ZÜRICH 41
1201 GENEVE
TÉL. 022 / 31 64 29

NGO軍縮特別委員会第21回会議（1976年2月7日、ジュネーブ）

で採択された原爆被害者に関する決議

下記に署名する非政府諸組織は、
—国連事務総長による「核兵器の可能な使用がもたらす諸影響と国がこれらの兵器を取得しこれ以上開発することの安全と経済にとっての意味」にかんする報告およびその他の専門家の調査結果が核戦争の性質とその危険を公衆に知らせるうえで重要であることを認め、
—しかしながら、これらの報告に含まれている核兵器使用の医学的諸結果についての情報が補足され、今日のものにならねばならないことに注目し、
—1945年にみずから被爆したものとその子孫にたいする原子放射線の影響についてとくに日本でこれまでお

こなわれてきた研究の重要性を評価し、
つぎの点について合意した。

1. 1945年に広島・長崎に投下された原爆の被害者の引き続き苦しみおよびその子孫にたいする原子放射線の影響についてのいっそうの調査を激励すること。
2. できれば、国連主催のもとに、世界保健機関の協力を得て、国際シンポジウムを開催し、すぐれた医学専門家を含む広範な代表的グループがこれらの調査結果を検討できるようにすること。
3. あらゆる手段をつくして、このシンポジウムの結果およびその他の関連情報を最大限に普及し、核戦争の実相について世界の世論によりよく知らせること。

NGO軍縮特別委員会第23回会議（1976年9月10日、ジュネーブ）

で採択された（原爆被害者に関する決議についての）議事録

現在までに、24の国際、各国組織が、NGO軍縮特別委員会第21回会議（1976年2月7日）で採択された原爆被害者に関する決議への支持を表明した。国際平和ビューロー（IPB）議長アーサー・ブース氏が今回の会議で説明したように、その後、この決議の執行にむけて重要な前進がおこなわれた。IPBは、1945年に広島・長崎に投下された原爆の影響で苦しんでいる人びとの継続する諸問題を研究するために、医学、社会学、その他の関係分野における国際的に承認された専門家の会議を来年、開催するよう計画している。IPBはまた、NGO、マスメディア、研究機関、その他世論に影響を与える諸組織の代表による一層おおきな会議に、上記専門家の会議の成果を提出し、この問題にできるだけ広範な注目を集めるよう計画している。

われわれは、IPBが本件についてとったイニシャチ

ブを熱烈に支持し、特に、世界保健機関（WHO）の積極的な関心と支持を確保する具体的なステップがとられたことを歓迎する。われわれは、提起されている研究について、WHOの完全な協力がえられるものと確信する。われわれはまた、来年開催される会議の計画について、IPBが他の組織の積極的な協力を求める予定であることを評価し、適切な主催・企画委員会を設立する目的で、アーサー・ブース氏が、2月7日の決議を支持しているNGOをはじめ、その他のNGOとも協議を続けるよう激励する。

本件についてIPBによってとられたイニシャチブにたいしてわれわれの支持と承認を与えるにあたって、われわれは計画されている諸会議を国連が主催する可能性をいささかも排除するものでないし、事実そのことをわれわれは心から歓迎するものである。

日本シンポジウムの発展・意義・支持

国際準備委員会議長
国際平和ビューロー議長

アーサー・ブース

国際平和ビューロー（IPB）は、1892年に設立され、2千万名をこえる加盟人員をもっている。この古く設立され、尊敬を受けている組織は、世界の独立した平和運動に役立つために規則によってジュネーブに事務所を維持している。IPBは1910年にノーベル平和賞を授与され、その多くの役員も同様の名誉を与えられてきている。これらの名誉が与えられたのは、IPBが政府と平和運動との相互の橋渡しをする能力をもっていたからであり、また、それが平和と戦争の問題を一般の人びとに説明することに成功したからである。

IPBは、国際連合経済社会理事会にたいして諮問的地位を有するNGOの会議によって設立された、ジュネーブの非政府組織軍縮特別委員会の事務局を無報酬でつとめている。このNGO会議は、諮問的地位をもたない組織を含めることはできないし、また、人権や軍縮のような重要な問題を取り扱うこともできない。しかし特別委員会上記のことを両方とも行なうことができる。

1976年に、IPBとその加盟諸組織のはたらきかけによって、特別委員会は、広島・長崎原爆の長期的影響についてさらに調査すべきことを求めた決議を承認し、同決議は24の組織によって署名された。特別委員会はその後、IPBのイニシャチブをたたえ、その議長アーサー・ブースが国際的後援者と運営機構をつくるための彼の努力を継続することをすすめた。

広島・長崎の爆撃は、ひじょうにしばしば、すぐに忘れられてしまう不幸な事件と見なされている。しかしこのことは、軍縮を国際的な議題に呼びもどすに足るだけ世界世論の空気を変えることに資するため、他のものたちといっしょに休みなく活動してきた、IPBとその加盟諸組織にとって、とうてい受け入れられないことである。非政府組織が参加できる国連世界軍縮会議の開催を求めたブラッドフォード提案の広はん普及は大きな役割をはたした。そして、このシンポジウムが着手された。

このシンポジウムはだれにたいしてもほこ先を向けるものではない。それは原爆犠牲者のためのものであり、

人間が生き残るためのものである。すでに行なわれた多くの立派な研究の高い価値は認められ、その最良のものは今回の新しい調査の基礎として用いられている。今回の調査においては、おそらくまだ十分わかっていない側面である、個人、その家族と友人、および彼らが生活している社会にたいする心理的社会的被害にたちいることにしている。

IPBの議長はクエーカー教徒であり、その会長はカトリック教徒であり、その他のIPBの人びともその他のいろいろな動機をもっている。しかし彼らはただひとつ共通なものをもっている。彼らは彼らの仲間を愛し、彼らは普通の人びとの健全さを信じ、彼らは人間が生き残ることを信じている。彼らは、軍縮に人間の顔を与えることによって、真の軍縮にたいするもっともよく知られた障害物と見なされている幻滅感と誤解の壁をつき破れるかもしれない、と信じている。

IPBひとりでこのことがなしえないのは明らかである。IPBは、その他のひじょうに多くの人びとや機関の援助をうけて、国際的な後援をえること、および必要な機構をつくることに着手した。著名な日本の、および国際的な専門家たちがすばらしい反応を示した。その多くが、人間の側面が彼らをひきつけた要素であったと指摘している。世界保健機関（WHO）、国連教育科学文化機関（UNESCO）、国際原子力機関（IAEA）、国連原子放射線の影響に関する科学委員会（UNSCEAR）、ストックホルム国際平和研究所（SIPRI）、その他から、多種の助言と援助が与えられた。国際連合の職員自身がたいへん奨励してくれ、こんどの8月にはその最高役員で参加するものもあろう。その市の義務を人道的にかつ見事にはたしている、広島・長崎両市長の高い社会的責任感、世界の感嘆をひきおこした。そして広島放射線影響研究所の最高役員の協力は、何千という日本の市民がすすんでこの事業を成功させるために懸命に誠実に活動していることとよくマッチした。

これは、日本だけでなく全世界の人民の、人民のための、人民によるシンポジウムである。それはユニークな

ものである。それは自発的なものだが、アマチュア的なものではない。それが人間の顔をしているがゆえに、また、それが科学的客観性と人間的誠実という高い基準を維持しているがゆえに、それはさいきんのもっとも重要な事件であるとするでいいあらわされている。しかしながら、なお避けなければならない落とし穴がある。

その成果は予想されたり憶測されたりしてはならない。それが特別な利益に仕えるための、あるいは、日本の平和運動の再統一をしいるための政治的策略であるという考えは、避けなければならない。原爆被害者を公衆の調査にさらすことは無情であると考えものがあるが、被害者みずからがすすんで協力していることがこのことを否定しており、被害者がこの機会の真の重要性を理解していることを示している。

もし日本の運動が再統一するならば、それは共通の人間的な感情というその本来の基盤にたちかえることであり、歓迎すべきことである。そして、それは、世界で最大の、もっともりっぱな動機をもち、もっともよく組織された平和運動となるであろう。しかし、これは副産物であり、シンポジウムがたずさわることではない。また、この作業を許された時間間隔のなかで行なうことはできないと考えているものもある。私たちはできると考えるが、もしできない場合でも、私たちは問題をまにあ

わせに処理したり、正確さがそこなわれるところまでプロセスを急ぐようなことはしないつもりである。その場合には私たちは中間報告書をつくり、必要なかぎり作業を継続するだろう。

シンポジウムは軍縮に人間の顔を与え、1978年の国連軍縮特別総会のために準備される軍縮綱領のなかに新しい1項目をうちたてることによって軍縮に決定的な発言権を与えることを計画している。私たちは、夢想的な理想主義者ではない。私たちは、最終的に決定は政治的レベルでなされなければならないことを知っている。

あまりに多くの人びとはただ、あの瞬間的な破壊と何千という死についてしか知らない。広島と長崎は、生き残ったものたちがどうなっているかについて世界に語る責任をもっている。これは、核兵器廃絶と核エネルギーについてのすべての討論において欠落している因子である。

このシンポジウムは、原爆被害者自体を援助すること、なかんずく、私たちがあやまちがくりかえされないことを確実にするまではだれも平安でいることを許されないということを保証することで、彼らを援助することを決意した、ハートとマインドによる真の国際的な運動である。
(1977年6月)

シンポジウムの成果を世界に

■NGO国際軍縮会議での日本代表の演説

■国連軍縮特別総会“NGOデー”での日本代表の演説

■経過の目録

NGO 国際軍縮会議での日本代表の演説

渡辺 千恵子

1978年3月2日 パレ・デ・ナシオン(ジュネーブ)総会会場

議長、来賓ならびに友人のみなさん、私はこれまで遠いヨーロッパへ旅行するなど、夢にも考えたことはありませんでした。ところが、いま私はジュネーブにきて、しかもNGO国際軍縮会議に参加させていただいています。どうしてこうなったのか、夢のようなこの現実について、まず私は申し上げなければならない気持ちでいっぱいです。

私は、ここにご出席のみなさまと、みなさまが代表している、平和を愛する人民の世論と運動にたいし、言葉にいいつくせない感謝をささげます。33年前、史上初めて投下された人類絶滅兵器＝核兵器によって死亡した広島・長崎のおびただしい数の市民と、こんにちまで生き残っている30数万の被爆者を代表して、私が死者の言葉でなく、なお生きている人間の言葉をもって、みなさまに語りかけることを可能にさせていただいたのは、まさにみなさまだからであります。みなさまの核兵器廃絶への努力と、ねばり強いたたかいこそが、長崎に投下された原爆によって死んで行ったかもしれない私に、生命と人間性の勝利をめざす運動の前進を体験させて下さっているのです。

みなさん、

私が長崎で原爆被害を受けたのは16歳のときでした。工場の崩れた鉄の梁に下半身を押し潰された後、やっと救い出されましたが、被爆後の約1年間は、放射線の強い影響もあったのでしょうか、腰や足の肉が腐り、食物はのどを通らず、危篤状態の苦しみを日夜味わいました。背椎骨折のため、自分の足で歩くことも、立つことすらもできず、その上被爆者を襲うさまざまな障害と病気のため、自分の青春も、健康も奪われ、やがて自暴自棄となり、必死に看病してくれる母をも苦しめました。

私がやっと原爆の死の呪縛から逃れることができたのは、同じ被爆者である母の深い愛情と、1955年、私の母と同じように戦争で苦しめられた世界の母親たちが、ローザンヌで世界母親大会を開き、日本でも、原水爆禁止運動が国民的な規模で始まったのを知ってからでした。

みなさん、

生命を生み育てる母親の心と、原水爆禁止運動がなければ、私が生きてはいなかったと同様に、人類のすべてにとって、核兵器を全面的に禁止することなしに、今後生きつづけることはできないでしょう。

原爆被爆者とは一体どんな人間でしょうか。私は思います。——おこりうる人類絶滅の第1撃を体験させられた人間なのだ、と。

広島・長崎の原爆は、一瞬のうちに恐るべき物理的被害をもたらしただけでなく、広い地域全体の住民の、人間らしい生活を根こそぎ破壊してしまいました。核兵器は、人間の尊さを破壊し、人間そのものを否定する兵器なのです。しかも、被爆者は、被爆当時の悲惨な経験もさることながら、その後30年以上にわたって、たえず、くり返し、いのち、くらし、こころの苦しみにさいなまれてきたのです。したがって被爆者は、人類絶滅戦争の生き証人だといってよいでしょう。

みずから被爆した経験がわたしに語らせる言葉をお聞き下さい。「こんど核兵器が使われるならば、人類は亡びてしまう」。これが原爆を実際に体験したものの結論です。しかも、核兵器使用の非人道性、犯罪性、非合法性は、人道の法、国連憲章、国際法に照らしても明らかだと、専門家からうかがっております。それにもかかわらず、いまなお核兵器の使用禁止すら実現されていないことは、私にとって、胸をかきむしられるような想いです。

私は、平和を願うすべての日本国民とともに、5月末から開かれる国連軍縮特別総会にたいして、核兵器を使うことは人道に反する犯罪としてただちに禁止することを、強く要請します。

みなさん、

昨年、NGOの主催で「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム」が日本で開かれました。このシンポジウムでは、たとえば、1967年に当時のウ・タント事務総長が国連に報告した核兵器白書において、広島・長崎の原爆による死亡者数がいちじるしく過小評価されていることが、明らかにされています。こ

のように、核兵器の恐ろしさについては、まだごく初歩的な事実さえ、かならずしも十分に知られていない、と
いってよいでしょう。私は、被爆者のひとりとして、国
連軍縮センターの活動が強化され、広島・長崎の原爆の
恐ろしさ、被爆者の苦しみについての正確な情報をまと
め、全世界に普及されることを期待してやみません。

みなさん、
私は、現代に生きるものにとって、平和を守りぬくた
めには、核兵器の完全禁止、使用禁止こそが、最優先の
課題でなければならないと確信しております。その理由
は、すでに述べたところにつきると思いますが、さらに
つけ加えれば、核兵器こそは、こんにちの軍拡競争の先
端をいく兵器であり、その禁止が、通常兵器をもふくむ
軍縮への糸口をきりひらくことになると考えられるから
です。私は、きたるべき国連軍縮総会が、核兵器の完全
禁止、使用禁止を最優先の課題としてとりあげ、全面的
軍縮へむけて歴史的な成果をあげることにより、被爆者
にも「生きていてよかった」と言える日が1日も早く訪
れることを願っています。

私は、ジュネーブでこの願いをみなさまとともに語り
合えるならばと、不自由な体にむちうち、日本代表団の

友人に支えられて、ここに参りました。私は33年前死ん
でいたはずの人間なのです。しかし、原水爆禁止運動の
なかで人間として甦り、人間が人間らしい歴史をつくる
事業に参加していることを、深く喜びとするものです。

議長、来賓、ならびに友人のみなさん、
私は、開会総会で、被爆者として、みなさまに語りた
かったのです。

核兵器による被害者のことばを聞いてから、この歴史
的な国際会議が開かれましたなら、会議の中で、もっと
もっと、真の平和にむかう心が生かされたことでは
う。

日本の被爆者の心が本当に理解されているなら、被爆
の実相が本当に知られているなら、明日にでも、核兵器
は廃絶されるはずだと考えます。このことを、私は、再
度強調しておきたいと思います。

私は、日本の被爆者37万を代表して、NGO国際軍縮
会議の成功と、核兵器完全禁止、使用禁止の運動の前進
を、心から望んで、ご挨拶いたします。

ノーモア・ヒロシマ！

ノーモア・ナガサキ！

ノーモア・ヒバクシャ！

国連軍縮特別総会の“NGO デー”での 日本代表の演説

田中 里子（国連に核兵器完全禁止を要請する）
日本国民(NGO)代表団事務局長

1978年6月12日 国際連合(ニューヨーク)総会議場

尊敬する議長、全体委員会の委員の皆さん、各国政府
代表の皆さん、

国際および各国NGOの友人の皆さん、

このたび国連がこの総会で、日本の国連代表派遣連絡
調整会議に発言する機会をあたえられたことに敬意と感
謝を表明したいと思います。

私たち500名の代表団はさる5月30日、ワルトハイム
事務総長に「国連に核兵器完全禁止を要請する2千万名
の署名」および要請文を手渡しました。この署名は今年
はじめからわずか5カ月の間に、日本国民の5分の1に
あたる人たちが書いたものです。そしてひとりひとりが
署名とともに10円、20円と寄せたカンパによって、500
名がこのニューヨークの地を踏んだのです。国連の置か
れているここニューヨークや、モスクワ、北京、ロンド
ン、パリ、さらには人類の3分の2が生きる第3世界を2
度と広島・長崎にしてはならないと確信したからです。

この署名簿の冒頭には3つのことがはっきり書かれて
います。第1は、広島・長崎の原爆の恐ろしさ、被爆者
の苦しみを、世界の人びとにもっと正確に、もっと広く
知らせること。第2に、核兵器を使うことは人道に反す
る犯罪として禁止すること。第3に、1日も早く核兵器
の実験、使用、製造、貯蔵、拡散、配備を全面的に禁止
する条約をつくること。

私たち日本のNGOは、国連がこの3点の実現によ
り、核軍備撤廃への着実な歩みを開始することを強く要
請いたします。

昨年夏広島で、国際NGO主催で開かれた被爆問題シ
ンポジウムで採択されたアピール「生か人類絶滅か」に
は、次の一節があります。

「全世界の女たちや男たち、若人たちと子どもたち、
団結せよ！ いよいよ増強されていく軍備に私たちをし
ばりつけている鎖を断ち切れないなら、私たちは、私た
ちの仕事、家庭、学校、遊び場、生活、文化、文明、そ
して世界を失うだろう。……全世界のヒバクシャよ、私
たちは自由に生まれてきたのに、私たちは世界中で、第
3次世界戦争の途方もない準備の奴隷にされている」。

今日の標準からすれば、はるかに効率の悪い原爆で、
1945年末までだけでも、広島で13万ないし14万人、長崎
で7万4千人が亡くなったとされています。

そして、やっと生き残った被爆者は33年経ったいまも
なお、心身ともに苦しめられ、さらに放射線の遺伝的影
響の不安が被爆者に常にぬぐい去ることのできない心理
的重圧を加え、またその子どもの結婚を妨げてさえいま
す。被爆者こそは核兵器の非人道性の生き証人なので
す。

私たちは、国連が、被爆問題シンポジウムで明らか
になった広島・長崎の被爆の実相や、被爆者の苦しみを、
世界の人びとに1日も早く、分かりやすく、正確に知ら
せることを要請します。そして、広島・長崎の被爆を全
面的な完全軍縮への出発点とするために、8月6日を核
兵器完全禁止をめざす“国連軍縮の日”として、国連が
宣言されることを熱望いたします。さらに、広島・長崎
での外国人被爆者、とりわけ朝鮮人被爆者、そして太平
洋諸島、アメリカ合衆国その他における核実験による被
爆の実相をも、国連軍縮センターが率先して調査し、そ
の結果を公表されるようもとめるものです。

1961年、国連第16回総会での決議(1653号)には「核
兵器の使用は国連憲章の直接違反であり、人類と文明に
対し無差別の苦しみと破壊をひき起し、国際法規と人道
に反する」と、はっきりうたわれています。しかし、そ
れから17年の間、これとはまったく逆行して核軍拡競争
にあげくれ、現在まで、どんな外交交渉や国際協定もな
んら効を奏していません。

核保有大国の最高指導者たちも、核先制の第1撃能力
がここ数年間いじめるしく増強されたためにいわゆる核
「抑止」論がくずれてしまい、小さな紛争が容易に全地
球をまきこむ、大国間の大衝突に発展する危険があるこ
とをみとめています。この点はさる2月、ジュネーブで
開かれたNGO国際軍縮会議で採択された最終文書でも
述べられています。このたび、非同盟86カ国のよびかけ
で軍縮特別総会が開かれるに至ったのも、このような重
大な危機感によるものです。

この歴史の流れを変えなければ、私たちの文明は、21世紀まで生き残らないかもしれません。それだからこそ、ぜひとも今回の総会で、核兵器の使用を国際法に違反する犯罪として完全禁止する条約（コンベンション）を、行動計画のなかに必ず折り込むことを、すべての国、とくに核保有大国が受け入れるよう要望します。

私たちは、昨年8月、第32回国連総会へのワルトハイム事務総長の報告、「軍拡競争の経済的社会的影響」に深い共感をおぼえました。過去20年の歴史は、軍拡競争がつくり出すものは雇用でも繁栄でもなく、失業、インフレ、経済的不平等を助長し、そしてまた、貧しい国を富める国にいっそう従属させていくことを証明しています。

さらに事務総長は「核軍備撤廃をもっとも優先させるべきである」と明確に指摘しています。核兵器の存在が、人類の生存そのものにかかわる脅威となっていることを憂慮し、具体的な措置として非核武装地帯の設置や、核兵器の拡散の禁止、さらに——新たにヒバクシャをつくる——核実験、より精密な兵器・体系の研究、開発の禁止を、速やかに実現すべきだと考えます。

これらを達成するには、米ソ2大国の主導にまかせるわけにはいきません。私たちは、国連総会を軍縮に関して最終決定を下す最高機関にするべきだと信じます。国連総会と軍縮委員会会議（CCD）との間に有機的な関連をつけ、CCDの再組織が行なわれることを要望します。

さらに私たちは、国連軍縮センターを拡充強化して、国連食糧機構（FAO）やユネスコと同じように十分な職員と資金と権限をもつ国連の機構とすること、また、その軍縮センターの諮問的な役目を果たせるよう、私たちNGOを位置づけるよう提案します。

「戦争は人の心の中で生ずるものであるから、人の心

の中に平和のとりでを築かなければならない」とユネスコ憲章は述べています。核兵器は人間がつくり、人間が操作しているものです。だからこそ、核兵器のない平和な世界をつくり出すことのできるのも、私たち人間です。広島・長崎を知っていて、しかもいま核戦争の脅威のもとで生きている私たちは、子供たちや孫たち、そして21世紀に生きる人たちのために、核兵器のない世界を築いておく、何よりも重大な共同の責任があります。そのためにも、来年の国際児童年を、核軍備撤廃と平和の実現のもうひとつの機会にするよう、国連および世界のNGOの皆さんに要請いたします。

軍縮特別総会は、まだ終わっていませんが、すでになりの成果をあげていると思います。世界のNGOは全面完全軍縮、とくに核兵器廃絶の運動をおこしています。世界中で世論がまきおこり、特別総会の討議と、それに呼応したNGOの活動が注目を集めています。

6月28日採択される最終文書が、現実にくしくて実りあるものとなり、私たちの共通目標の促進に貢献して、そして、この特別総会を人類の直面している破壊から平和への新しい希望にむかう転機とすることが、私たちの切なる願いであります。

いよいよ最後になりました。被爆者たちが書き綴った数多い原爆詩の中から次の一編を引用して私の訴えを終わりたいと思います。

ちちをかえせ ははをかえせ
としよりをかえせ こどもをかえせ
わたしをかえせ わたしにつながるにんげんをかえせ
にんげんの にんげんのよのあるかぎり
くずれぬ いわを へいわをかえせ

経 過 の 日 誌

<1974年>

12月4日 日本の民間代表団がニューヨークの国連本部で、政治・安全保障問題担当事務次長アルカディ・N・シェフチェンコ氏と会見し、国連が核兵器完全禁止国際協定の締結でイニシャチブをとることを要請した。

<1975年>

12月8日 日本の民間代表団がニューヨークの国連本部で事務総長クルト・ワルトハイム氏と会見し、国連が、原爆被害者の実情についての現在の情報を補足し、今日的なものにするために、いっそうの研究を行なうことを要請した。

<1976年>

2月7日 NGO軍縮特別委員会（ジュネーブ）第21回会議が、原爆被害者に関する決議を採択した。

8月 『広島、長崎の原爆被害とその後遺——国連事務総長へのレポート』が日本の専門家グループによって作成され、国連事務総長に提出された。

9月10日 NGO軍縮特別委員会（ジュネーブ）第23回会議が、原爆被害者に関する決議についての議事録を採択した。

10月10日 日本の国民代表団がニューヨークの国連本部で、総会議長H・S・アメラシング氏と会見し、国連が核兵器の使用を人道にたいする犯罪として禁止するための措置をとることを要請した。

12月1日 広島・長崎両市長がニューヨークの国連本部で事務総長と会見し、『原爆被害の実態——広島・長崎』についての報告書を提出した。

12月 日本の各界を代表する78氏が、シンポジウム

のための日本準備委員会を結成することをよびかけた。

12月3日 シンポジウムに関心ある組織と個人の最初の会議が、ジュネーブのWHOで開催された。

12月6日 シンポジウムのためのビューロー会議がジュネーブのWILPF（婦人国際平和自由連盟）事務所で開催された。

12月18日 シンポジウムのための日本準備委員会が東京で設立された。

<1977年>

1月28日 シンポジウムのための国際準備委員会が設立され、その第1回会議がジュネーブのWHOで開催された。

3月9日 国際準備委員会ビューロー会議（ジュネーブ、IPB）

3月27日 被爆者調査全国研修会が東京で開催された。被爆者調査開始される。

4月 日本側専門家によるシンポジウムのための作業文書の起草が開始される。

4月8日 シンポジウム推進団体連絡会議が東京で結成される。

4月20日 国際準備委員会第2回会議（ジュネーブ、WHO）

5月18日 国際準備委員会ビューロー会議（ジュネーブ、IPB）

6月4日 第1段階の国際側専門家グウェンディ・ナイト女史がシンポジウムの準備に協力するため来日した。

6月 作業文書の第1次草案が完成し、国際側専門家に送付された。

7月 作業文書の最終草案が完成した。（国際調査団の東京での第1回会議で国際側専門家に配布された。）

7月15日 アーサー・ブース議長夫妻が来日し、国際準備委員会の事務所がジュネーブより東京に移

転した。

- 7月21日 シンポジウム第1段階＝国際調査（東京・広島・長崎）
 7月30日 国際準備委員会と日本準備委員会の合同会議（広島）
 7月31日～シンポジウム第2段階＝NGOと研究機関の
 8月2日 シンポジウム（広島）
 8月5日 シンポジウム第3段階＝広島ラリー
 8月6日 アーサー・ブース、ショーン・マクブライド、フィリップ・ノエルニベーカー、ジョージ・ウォルドの4氏がシンポジウムを代表し、来日中の国連総会議長H・S・アメラシンゲ氏と会見し、シンポジウムの報告資料一式を手渡した（広島）。
 8月8日 シンポジウム第3段階＝長崎ラリー
 10月24日 “NGOとSSD”と題するセミナーが、NGO軍縮特別委員会（ジュネーブ）の主催で、ジュネーブのパレ・デ・ナシオン（国連欧州本部）で開催された。

＜1978年＞

- 2月27日～NGO国際軍縮会議が、NGO軍縮特別委員会（ジュネーブ）の主催、NGO軍縮特別委員会（ニューヨーク）の協賛でジュネーブのパレ・デ・ナシオンで開催され、日本より88名の代表団が参加した。
 3月2日 渡辺千恵子（長崎の被爆者）さんがNGO国際軍縮会議の閉会総会で演説した。
 5月23日～軍縮を専議する国際連合特別総会がニューヨークで開催された。
 5月22日～国連に核兵器完全禁止を要請する日本国民
 6月9日 （NGO）代表団502名が国連特別総会へむけて訪米、各種の要請行動を展開した。
 5月30日 国連に核兵器完全禁止を要請する署名18,694,225名分を国連事務総長に手渡した。
 6月12日 国連軍縮特別総会の“NGOデー”で日本のNGOを代表して田中里子（国連に核兵器完全禁止を要請する日本国民（NGO）代表団事務局長、全国地域婦人団体連絡協議会事務局長）さんが演説した。

＊本書の写真は森下一徹氏の提供によるものです。

被爆の実相と被爆者の実情

—— 1977 NGO 被爆問題シンポジウム報告書

1978年9月15日発行

定価 3,800円

編集 ISDA JNPC 編集出版委員会

〒105 東京都港区新橋6-19-23 日本被団協気付

発行 朝日イブニングニュース社

〒104 東京都中央区築地7-8-5

寄 贈 者			
氏 名	前座 良明		
年月日	2016	7	12

